
3人の仮面ライダーの物語

辰巳 結愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3人の仮面ライダーの物語

【Nコード】

N6952P

【作者名】

辰巳 結愛

【あらすじ】

個人的に好きな仮面ライダー3人を、トリロジー的何かでお送り致します。本当に個人的な趣味です。

Episode SILVERは「仮面ライダーW」よりスカル編「迦楼羅像を見つけて」と言う依頼から始まる、鳴海探偵事務所のささやかな日常。

Episode BLACKは「仮面ライダーBLACK」よりブラック編。「BLACK」と「RX」の間で起こった、2人の少年との出会いの物語。

そしてEpisode WHITEは「仮面ライダーディケイド」
よりキバ編。次々と消える仲間を救うべく奔走する夏海の物語。
……を予定しております。

ひゆるり、と街の中を風が甲高い笑い声を上げながら人々の間を縫うようにして舞い踊る。

ここは「風都」。風力発電が盛んな、エコの街だ。

その街の一面に、この「鳴海探偵事務所」が存在する。

探偵事務所と言っても、個人経営だ。小さいし、調査員も所長である鳴海莊吉以外はいない。そもそも、莊吉が雇わないと言ったこともある。

押しかけるようにして入ってきた、「自称助手」がいるにはいるが、少々やんちゃでハラハラさせられる。自己判断、単独行動は当たり前。迷惑をこうむる事もしばしばだが、磨けば良い「探偵」になるだろうと踏んで、ここにいる事を許可している。

本当に不要な存在なら、居つく前に叩き出す。それが莊吉のやり方だ。

これは、まだこの風都に、「ダブル」と呼ばれる仮面ライダーが現れる前の依頼である。

師走も下旬、雪がはらはらと舞い、この街に淡い化粧を施す季節。人々は目の前に迫った聖誕祭に浮かれ、商店街を歩けばこの時期定番の曲が耳に入る。吐き出す息の白さすらも、この時期特有の物として人々は暖かく受け入れている。

街がそんな、浮かれた空気に包まれた中……およそこの時期に似つかわしくない格好の男が、この鳴海探偵事務所の扉を叩いた。

それこそが今回の依頼人。

風雲寺に住まう僧侶で、法名を雲夜と言った。

歳は18、寺の跡取り息子で、この街でもそれなりに名の通った

僧侶の1人。体つきは大柄で、一見すると強面だが……その外見とは裏腹に、仏の教えを守る心優しき青年である。

その彼が、今にも泣きそうな表情で莊吉の前に座っているのは、何とも滑稽に映る。少なくとも、莊吉の「助手」……左翔太郎にとっては、不思議な場面だった。

彼の怒った顔を滅多に見ることは無いが、今のような泣きそうな顔と言うのも、これまた珍しい。

そんな風に思いつつ、翔太郎は彼にそつと茶を差し出す。差し出された方は、翔太郎に向かって弱々しい笑みを返すと、その茶を一口だけ啜る。

かなり緊張していたようだが、茶を啜った事で少し落ち着いたのであろうか、軽く溜息を1つ吐き出して、単刀直入に切り出した。

「……実は、迦楼羅^{カルラ}を見つけて欲しいんです」

「見つけるって……え！？ 風雲寺の迦楼羅像が無くなったのか！？」

「翔太郎、少し静かにしている」

雲夜の言葉を聞き、驚いたような声を上げた翔太郎を莊吉は軽く窘^{たしな}める。

とは言え、彼も少なからず驚いているのか、僅かながらも眉を顰め、軽くその身を前に乗り出していた。

「風雲寺の迦楼羅像」と言えば、この風都でも有名な彫刻の1つだ。仏像には詳しくなくても、迦楼羅の事は知っているのが風都の人間……というくらい、この街では馴染み深い。

迦楼羅とは、千手観音の使いの1人。鳥の顔を持つ仏で、烏天狗の元になったとさえ言われている。元々はガルーダが訛った物らしい。

風雲寺の迦楼羅は、普段ガラスケースの中に納められてこそいるものの、基本的に誰でもいつでも拝観する事が出来る。

その迦楼羅の「世話」をしているのが雲夜らしいのだが……

「無くなった、という言い方が正しいのかどうかは分かりませんが…

…少なくとも現在、寺にあるのは贗物です」

掠れた声ではあったが、目を伏せながらも言い切る雲夜。その手は膝の上で悔しげに袈裟を握り締め、ぶるぶると震えている。

俯いているのではつきりと表情は見えないが、恐らく彼は悲しんでいるのだろうと、翔太郎は思う。

雲夜にとつて、幼い頃から共にあった像だ。ある意味、彼にとつては友人と言ってもおかしくない付き合いだったのだと思う。

それが、贗物とすり替えられたとあつては、その悲しみは計り知れない。

思わず同情にも似た干渉と、「犯人」に対する怒りを覚えてしまふ翔太郎とは対照的に、莊吉は小さく首を傾げ……そして、短く問いかけた。

「贗物だと分かってから、真っ先にここに来たのか？」

「え？ おやつさん、そいつはどう言う意味なんだ？」

鋭い視線を雲夜に向ける莊吉に、彼の問おうとしている意味が理解しきれないらしく、翔太郎がきよとした表情で問いかけた。

それをどう思ったのか、莊吉は視線を雲夜から外さないまま、さらに言葉を続けた。

「迦楼羅は風都でも有名な仏像の1つだ。それが贗物だと分れば、かなりの大騒ぎになる」

「……まあ、それは確かに」

「だが、俺も翔太郎も、たった今その事を知った。と言う事は、この一件はまだ公にはなっていない」

そこまで言うと、莊吉は渋い顔で自分の手元のカップの中身を一口啜る。

今日のコーヒーはいつもよりも苦味も渋味も強い気がする。まるで、この一件が抱く闇を、そのまま味にしたかのように。

勿論、彼には味で何かを占うと言う趣味も能力も無い。単純に口ーストの加減を誤ってしまった事に原因があるのだらうとは思うが

……それでも、妙な胸騒ぎを感じ取ってはいた。

それをおくびにも出さず、莊吉はゆつくりと視線を翔太郎に持つていくと、その眼前に人指し指を突きつけ、問いかける。

「翔太郎。お前が雲夜の立場なら、最初に誰に報告する？」

「え？ そりゃあ……多分、住職さんじゃないのか？ 何しろ、持ち主なんだし」

「そうだ。最初に住職に相談するのが筋って物だ。そしてあの住職なら、贗物にすり替えられた事を隠す必要は無い。当然、騒ぎにもなる」

莊吉のその声に、雲夜は微かに……だが、確実にその大きな体を震わせ、ゆつくりと首を横に振った。

「住職には……祖父には、報告していません。実は今、床に臥している状態ですから」

「え！？ 住職さん、病気なのか！？」

「と言っても、重篤な病では無いんです。でも……少し気落ちしている事は、確かです。そんな時に、祖父も大切に思っていた迦楼羅が贗物とすり替えられたなどと言ったら……」

確かに、これ以上無いくらいの衝撃を受けるだろう。思い、翔太郎が同情しかけたその瞬間。唐突に雲夜は顔をあげ、恐れ戦いた様な表情を作ってその巨体をガタガタと震わせ……

「怒り狂って何しかすかわかったものじゃありません！ 怒りのあまり定刻の鐘を力の限り打ち鳴らすだけに飽き足らず、僧侶全員への過去最長記録のお説教と、座禅、そして滝行のフルコースが待っているに違いありません！ 私達だけならともかく、鐘はご近所の皆様方に迷惑が……」

その言葉に、思わずずっこけそうになる翔太郎の隣では、呆れた様に莊吉が溜息を吐き出している。そんな彼らの足元に、雲夜はひしと縋り付き、頭を下げる。

その勢いは、ほとんど土下座に近い形であり、理由はどうあれ雲夜の必死さを伝えるには充分であった。

「今、寺にある迦楼羅は、確かにいつもの迦楼羅と同じ様に見える。他の人間が見間違ってもおかしくありません。私も、最初はいつもの迦楼羅だと思っておりましたから。でも、違う。彼は、あんな凶悪な顔はしない」

ぶるぶると震えて言う雲夜の顔に大粒の涙が浮かび、堪えきれなくなつたその雫は、ぽたりと落ちて事務所の床に染みを作る。

1度決壊した涙腺は、もはや雲夜の意志に関わらず、次々に零れ落ちては床に染みを作っていく。涙で出来た小さな海の中に頭を擦りつけ、もはや完全に土下座の体を見せながら、彼は莊吉に向かって言葉を紡ぐ。

「どうか、お願いします。迦楼羅を……私の相棒とも呼べるあの像を、見つけて下さい」

その言葉に、莊吉は何を思つたのか。

椅子から降り、雲夜に向かってくると背を向け……そして、言つた。

「雲夜、これだけは忘れるな。人生の中で、男が涙を見せていいのは2度だけだ。1度目は最高の相棒を見つけた時、そして2度目は最愛の存在を見つけた時」

言葉を放つと同時に、彼は壁にかけてあつた白いソフト帽を手に取り……そして、それを目深に被る。

それは、彼が探偵として動き始める事を意味していた。

「依頼は受けよう。だから……お前のその涙は、迦楼羅が見つかった時までとっておけ」

帽子の鍰で目元を僅かに隠すようにしながら、鳴海莊吉は早速動き出す。

まずは、その「贗物の迦楼羅」を見る……

風雲寺の迦楼羅像。高さおよそ20センチ程度の、割と小柄な木像だが、彫られたのは鎌倉時代とも平安末期とも、果ては飛鳥時代

とさえ言われている。少なくとも、世界大戦はおろか、戦国乱世をも見てきた歴史はあるらしい。

ガラスケース越しにこちらを見る瞳は、鋭いながらもどこか温かみを感じさせる。足元で蛇を踏みつけているが、その意味は煩惱の象徴である蛇を迦楼羅が喰らい尽くす存在だからだと言われている。足元では煩惱を踏み潰しながら、その手にはフルートのような横笛を持ち、そこから音を奏でている様子が見て取れる。

「はあ……いつ見ても凄い存在感だなあ。ガラス越しでも何かこう、威圧されてる気がするぜ」

迦楼羅を見ていた翔太郎が、思わず感嘆の声を漏らす。

確かに、小柄ながらも十分な存在感を醸し出しているのが分る。

「でもこれ……本当に贗物なのか？ 前に見た時と違いなんて無い気がするんだけど」

「贗物ですよ。そこにいる迦楼羅の瞳をよく見て下さい。そこが一番分り易いでしょう」

「瞳……？」

雲夜に言われ、2人はじつと迦楼羅の瞳を見つめ……そして、気付いたらしい。2人同時に軽く顔を顰め、雲夜の顔を見やった。

迦楼羅の両の瞳にあった物。

それは、本当にごく小さい物であったが……「S」と言う文字が彫られていたのだ。

「今まで、あんな物はありませんでした。変わってしまったのは……」

「昨日、彼が返ってきてからなんです」

「返って来る、だと？」

「言っていないんですけどしたっけ？ 実は……先日まで、迦楼羅は他所に出ていたんです。『特別展示』ということだ」

「俺は聞いていない」

「じゃあ、多分言い忘れていたんですね。申し訳ありません」

雲夜がそこまで言った瞬間、彼らの背後で咳払いが聞こえた。

振り返った先にいたのは、3人の人間。その内2人は僧侶で、一

方はひよろりと背が高く、もう一方は小柄で童顔。袈裟を見る限り、おそらく雲夜と同じくこの風雲寺の僧侶なのだろう。

別の1人は灰色のスーツを着た、貧相な顔の中年男性で、どうもこの寺の雰囲気になじめない。

もつとも、それは荘吉や翔太郎にも言える事だが、どうにも胡散臭い雰囲気漂っている。態度も、迦楼羅を拝観に来た、と言う印象では無い。

明らかに雲夜を敵視しているように見える。2人の僧侶も、どこか雲夜を馬鹿にしたような視線を送っているのが見て取れた。

「何だ雲夜、お前まだそいつが贗物だ、とか言って騒いでいるのか？」

「困るんですよ、そんな事を言われちゃあ」

「光雲こううんさんに彩雲さいうん……それに、隅田すださんも」

細い僧侶に続くように、灰色のスーツの男が言葉を吐き出す。一方の雲夜も、彼らの姿を見止めるや、ほんの僅か……一瞬だけではあったが、その目を軽く3人から反らした。

「あのー雲夜さん、一緒にいらっしゃる胡散臭さ全開の2人組は、どちら様なんです？」

「胡散臭いって……」

童顔の僧侶に言われてカチンときたのか、翔太郎はむっとしたように顔を歪めて相手に掴みかかろうと、1歩前に踏み出す。しかし、2歩目を出そうとした瞬間、翔太郎の体の前に荘吉の腕が差し出され、それ以上前に進む事を禁じた。

「翔太郎、いつも言ってるよな？ 男は常に冷静であれ、感情に流されるなと」

「おやっさん……分かったよ。分りました」

尊敬する荘吉に言われ、何とか翔太郎はこみ上げる感情を飲み込んでその場に踏みとどまる。

止めてくれなかったら、今頃あの童顔の僧侶を殴り飛ばしていたかもしれない。自分はやはり、まだまだ青いと反省しつつも、鎮め

きていない怒りが彼の目を険しくさせた。

一方で、挑発してきた童顔の僧侶は、軽く首をすくめてニヤニヤと笑っている。

同じ僧侶でも、人間性は雲夜や住職とは雲泥の差だな、と心の中でのみ莊吉は呟きながら、相手の姿をじっと見つめた。

「……こちらは、探偵の方です。鳴海莊吉さんと、その助手の左翔太郎さん。あちらは兄弟子の光雲さんと、弟子の彩雲。そして美術商の隅田 ひとかた 壱片さんです」

「鳴海莊吉だ」

「始めまして鳴海さん。ご紹介に預かりました、隅田です。美術商の他に、小さな美術館も営んでおります」

名刺を交換しつつ、睨みつけるようにこちらを見やる隅田を、莊吉は冷静に観察する。

綺麗に切りそろえられた爪に、灰色のスーツにはこれと言った汚れは見当たらない。貧相に見えるのは、落ち窪んだ目のせいなのだろう。

「しかし、本当に困るんですよえ、雲夜さん。ウチから返ってきたら贗物になっていた、なんて騒がれちゃあ。今後の営業に支障が出るんですよ」

「別に、隅田さんが取り替えたとか、そんな風には思っていないです。でも……でも、この迦楼羅は元の迦楼羅とは違うんです」

「そうか？ 俺には同じに見えるんだけどな。仮に本当にそいつが贗物だったとしても、いいじゃないか。どうせ誰もそれが贗物だと分らないんだから。と言うか、そこまでお前が迦楼羅に拘る理由が分らないな」

光雲に言われ、雲夜が悲しそうに目を伏せる。

確かに、誰も気付かないかもしれない。実際、瞳に掘られた「S」の字に気付かなければ、寸分違わず元の迦楼羅像と変わらない。外観が同じなら、どうでもいいと思う者は、おそらく光雲だけでは無いはずだ。

だが……雲夜にとって、迦楼羅は「代わりのきく木像」では無い。幼い頃から触れ合ってきた、大切な「家族」なのだ。その家族を心配する事に、何か悪い事があるだろうか。

そんな雲夜の考えを理解しているのかいないのか。光雲はチツと1つ舌打ちすると、今度は真っ直ぐに莊吉を睨み付け、口を開く。
「とにかくだ。部外者は引っ込んでいて欲しいな。特に、探偵なんて怪しげな職業の人間は」

「断る。こいつは俺が受けた依頼だ。依頼人から取り下げられたならともかく、外野にとにかく言われる筋合いはねえ」

莊吉の方も一步も怯まず、光雲の視線を真っ直ぐに受け止め、きっぱりと彼の言葉を切り捨てる。しばらくの間、光雲と莊吉の間で見えない火花が散るが……莊吉の視線に気圧されたのか、光雲はついと目を反らし、そのままくるりと踵を返す。

そして、部屋から出る直前、もう1度だけ莊吉と雲夜の方を見やり……そして、何事か呟いて、ドスドスと荒立たい足音と共に部屋の外へと出て行ってしまう。

そんな彼に続くようにして、彩雲と隅田もまた、莊吉達の目の前から姿を消した。

まるで、これ以上迦楼羅については話したくないと言っているかのように。

「おやっさん、絶対今回の一件はあいつらが絡んでるって！ 特にあの光雲とか言うひよろい坊さんが怪しいと思うんだけど……」

「翔太郎、先入観は捨てる。こいつは目を曇らせるだけで、何の役にも立たない」

事務所に戻る道すがら、密やかな声で言ってきた翔太郎に、莊吉は見向きもせずに答える。

街は白ヒゲのおじいさんに扮した人々が、様々な看板を掲げて道行く人々に商品のアピールをしている。莊吉は迷う事無くその中の

1人……なぜかサングラスをかけている男の肩を軽く叩き、声をかけた。

「サンタ。頼んでいた情報はあるか？」

「そーきつちゃん、『サンタ』じゃなくて、『サンタちゃん』って呼んでよ、も」

「お前が俺を『莊吉』と呼ぶなら考えてもいい。……あるのか？」

強面な見た目とは対照的に、妙に明るいその男……情報屋の1人である「サンタちゃん」は、莊吉のこの態度に慣れているのか、やれやれと言わんばかりに溜息を吐き出すと、袋の中から茶封筒と写真を取り出した。

「あるよ。時間が殆ど無かったから、結構大変だったけどね」

写っているのは先程会った隅田壱片。茶封筒の中身は、彼に関する情報らしい。莊吉の後ろから翔太郎が覗き見ると、そこには彼の「悪の経歴」が書かれていた。

「昔は結構やんちゃしてたみたいね。前科4犯、その内2回が詐欺で捕まってる。3年前に出所^できて以来は、流石に反省したのか、真っ当に仕事してるみたい」

トントン、と書類の中に書かれている「詐欺罪で逮捕」と言う文字を軽く叩きながら、サンタちゃんは眉を八の字に下げて溜息混じりに言葉を放つ。

その言葉を聞きながら、莊吉は先程会った時の記憶を辿る。

手が綺麗だったのは、美術品を扱う際に手袋を使っている為。目が落ち窪んで見えたのは、ループを扱う事が多いからだろ。実際に手袋は彼の胸ポケットに入っていたし、目の周りにはループを扱う時に出来る真円系の痕が付いていた。

美術商と言うのは間違いないだろう。ただし……彼の掌にあった、ガイアメモリのコネクタを無視すれば、の話だが。

——どうやら、奴のコネクタがいつからある物なのかを調べる必要がありそうだな——

そこまで考えをめぐらせると、莊吉は後ろに控える翔太郎の方を

振り返り……

「翔太郎、お前は先に帰れ」

「え！？ 何でだよ！？」

「ここからは男の時間だ。頭に殻を乗せているひよつこのお前には、任せられない」

その言葉に、反論しようと翔太郎は口を開きかけ……だが、帽子の向こうで鋭く光る荘吉の瞳に射すくめられたのか、彼はぐっと言葉に詰まると、渋々と言う風に首を縦に振った。

本当は自分も手伝いたい。

幼い頃から憧れていた人物である荘吉を。

しかし、自分にはまだ、認めてもらえる程の仕事が出来ない事も、彼についていくだけの実力が伴っていない事も理解している。

だからこそ、彼は……悔しいが、頷くしかなかった。

「分かったよ。分りました。晩飯でも作って気長に待つてるよ」

「分れば良い。ああ、それから……」

「『奥の部屋への扉は触るな、幽霊が出る』だろ？ 分かってるよ、おやつさん」

二、とほんの少しだけ悔しそうに笑いながら、翔太郎は荘吉に言葉返す。

だが……荘吉は軽く首を横に振り……

「いいか翔太郎。俺が事務所の留守を頼むと言う事は、背中を預けているのと同じ事だ。これがどういう意味か……分るな？」

口の端に、微かに笑みを浮かべ。

荘吉はニヤリと笑いながら言う。

その表情を、その言葉の意味を。翔太郎は必死で考え、そして……ほんの少しだけ、彼に認めてもらえたのだと理解した。

それまで不機嫌そうだった表情が吹き飛び、ぱあっと彼の顔に喜びの色が浮かぶ。目元に微かに浮かんでいるのは感動の涙だろうか。表情がすぐに出てしまうのはハードボイルドからは程遠いが、それでも翔太郎は口元がニヤつくのを押さえられそうに無かった。

「分かったらさっさと帰れ。いいな？」

「ああ！」

嬉しそうに大きく1つ頷き、街の雑踏に紛れていく翔太郎の背をどこか嬉しげに見送ると、莊吉もまた、雑踏の中へと消えていく。

その様子を見守りながら、サンタちゃんはポツリと呟きを落とす。「全く。そうきつちゃんもきちんと言葉にしてあげればいいのに。本当に、素直じゃないんだから」

キンと冷え切った空気を肌で感じながら、莊吉は隅田の構えている店に向かって歩を進めていた。

だが……何故だろうか。彼は、わざと人気の少ない道を選びながら、そこに向かっていているようだった。

大通りを使えば直線距離で10分とかからないにも拘らず、人の少ない裏路地を選んで、かれこれ30分は歩き回っている。

そして……莊吉は唐突に、歩くのをやめた。

「……出てきたらどうだ？ さっきから俺をつけて来ているだろう？」

振り返りもせず、莊吉は自分の背後の気配に向かって声をかける。声をかけられた方は、一瞬だけ動揺したような気配を見せ……何かを決意したらしい。小さな音が聞こえた直後、電子音に似た何かが辺りに響いた。

——Statue——

その音を聞いて、ようやく莊吉が振り返る。

彼の視界に入ったのは、右手が真鍮、左手が青銅、右足が石、左足が石膏、そして顔の部分が木で出来ているように見える怪人……ドーパントだった。

「……スタチュー……『像』のドーパントか」

さして驚いた様子も無く、むしろ溜息混じりにさえ聞こえる声で莊吉はそう呟くと、冷ややかな視線をそのドーパントに送る。

『……迦楼羅の事、これ以上嗅ぎまわらない方が、身の為ですよ？』

「断る。依頼を受けた以上は完遂する。それが俺の信念だ」

『信念と命では、命の方が大事でしょうに』

「信念を曲げて生き長らえても、それは死んでいるのと同じだ」

『……厄介な人だ。じゃあ……物理的に死になさい、探偵』

「それも断る。俺はまだ、依頼を果たしていないんでな」

吠えたドーパントに向かって冷静に言葉を返すと、莊吉は真っ直ぐに繰り出された相手の拳を軽くかわし、相手の勢いを利用して、その顔面に蹴りを放つ。

『がつつ！？』

莊吉の膝を、もろに鼻に喰らい、ドーパントは情けない声を上げると大きくのけぞってその場に膝と手を付いた。

『くそ……よくも私の顔をつ！』

「勝手に突っ込んできたのはお前だ。さて、迦楼羅を返してもらおうか？」

『……お断りします！』

莊吉の言葉をきっぱりと拒絶したと同時に、ドーパントの足元の地面が盛り上がる。そして次の瞬間、アスファルトの下にあった土が意思あるものの様に形を変え、あつと言う間に3メートル近くもある土人形と化した。

それは莊吉としても予想外だったのか、一瞬だけその目を見開き……だが、すぐにいつもの冷静な顔に戻ると、やれやれと言わんばかりに首を横に振った。

『潰れて死になさい、探偵！』

ドーパントの咆哮に応えるように、土人形の腕が莊吉を押し潰すべく彼の頭上へと落ちて行き……

——skull——

宣言にも似た音が響いた。直後、土人形の腕が爆ぜ、濛々と土煙を上げる。

『な……何！？』

「やれやれ。ドーパント絡みであれ、極力ガイアメモリは使いたくなかったんだがな……」

土煙の向こうから、莊吉の声が響く。

だが、そこに立っているのは、腰に赤いバツクルの付いたベルトを巻きつけた黒い体に、銀色のマフラーを靡かせる「銀色の骸骨」。唯一莊吉の名残を残しているのは、その骸骨が被っている白いソフト帽。

『お前も、ドーパント！？』

「違う、とは言わん。そう大差無いからな」

ドーパントの言葉に返しながら、莊吉……否、スカルは手に持つ銃で土人形を完全に粉碎する。

それに恐れをなしたのか、ドーパントはひいと小さく悲鳴をあげると、もう1度地面に手を付き、今度は小型の土人形を生み出した。大型でパワー型だった先程の土人形とは異なり、力はさほど無いが、小回りが利く上に数が多い。

スカルの銃撃は、当たりはするものの、その数を決定的に減らすまでには至らない。足元をうるちよろするので、動きたくてもなかなか動けない。

その隙に、ドーパントはその姿を消し……やがて彼の力の範囲外にでも逃げ切ったのか、それともメモリを体から抜き出して雑踏に紛れたのか。小型の土人形がびたりと動きを止め、ただの土塊と帰した。

「……逃げられた、か」

冷静に、だが微かに悔しさを声に滲ませつつ、スカルはバツクルに挿したメモリを抜いて、その姿を鳴海莊吉に戻す。

仕事でガイアメモリを使わない事が彼のポリシーだが、今回はそうも言っていられないらしい。

やれやれと言う思いと共に、莊吉は軽く1つ溜息を吐き……そのまま家路に着いた。

その様子を少し離れて見ている人物には、気づく事のないまま……

こんばんは。

お初にお目にかかる方……はいらっしゃるのかどうか分かりませんが、とにかく相変わらず行き当たりばったり人生をひた走っております、辰巳です。

風化しないうちに、ネタを形にしたい。

その欲望が今回の「3人の仮面ライダーの物語」と言うトリロジー的何かになりました。

第一弾は旬のスカル様。

……「莊吉様はこんな人じゃない」と言うツッコミありましたら、それとなくお伝え頂けましたら幸いです。

最後に。

出来る限り年内更新をしていきたいと思っております。

お時間許されるようでしたら、お付き合いいただけますと幸いです。

「お帰りなさい、おやつさ……ってなあぁ!？」

「煩いぞ、翔太郎」

帰ってきた莊吉を見るなり、顎が外れるのではないかと思えるくらい口を大きく開き、声を上げる。そんな彼を見る度、本当に「ハードボイルドな男」と言うものを目指しているのかと疑問に思うが、そこは彼の青さ故なのだろう。

その辺りは、経験を積みれば改善されるだろうが……どうにも、翔太郎には似合わないような気がする。何事にも動じず、情に流されない冷酷さを持った彼は、果たして「左翔太郎」と呼べるのか……そんな事を考えるも、それを顔には出さずに莊吉は軽く翔太郎をねめつける。

その視線を受けながらも、翔太郎は相変わらず驚いたような表情のまま、おろおろと莊吉の顔を見つめ……

「どうしたんだよ、おやつさん!? 泥だらけじゃねえか!？」

心配そうに言われ、莊吉はふうと溜息を1つ吐き出すと、泥に塗まみれたスーツを脱ぎつつ鏡に向かう。

そこでようやく、自分の姿を見た訳だが……成程、翔太郎が驚く訳だと納得する。スーツが汚れていたのは気付いていたが、同じ様に靴や顔までもが泥に塗れている。

恐らく、先程の泥人形との戦いの際に付いたのだろう。唯一の救いは気に入っている帽子だけは無事だった事だろうか。変身していたにもかかわらず、服が汚れるとはどう言う事なのか、と疑問に思わなくも無いのだが。

「……なに、ちよつと犯人から『ご挨拶』をされたただだ」

「犯人って……やっぱり、あいつらだったのか？」

「さあな」

翔太郎の言う通り、恐らくはあの3人……隅田壱片、光雲、彩雲

のうちの誰かだろうと予想される。特に隅田は、コネクタの存在を確認している分、怪しく映る。

しかし、実際に莊吉が相手にしたのはドーパントだ。姿はおるか、声だって変わる。完全に相手を特定する事は、現段階では難しい。冷静に考える莊吉を他所に、翔太郎の方は新しい莊吉の服を出しながら、悔しげに言葉を吐き出していた。

「くっそー……姿を見せずに襲うなんて、卑怯じゃねえか」

「そう、思つか？」

「当たり前だろ！ 闇討ちなんて卑怯な真似、俺は許せねえ」
きつく拳を握り締めながら翔太郎の瞳は幻の犯人を睨みつけている。

どうやら彼は、莊吉が闇討ちにあつたのだと受け取ったらしい。実際には堂々と正面から襲われた訳だが……相手がドーパントの姿だった事を考えると、あながち完全な間違いでもない。

どちらにしろ、己の正体を隠し、その上で邪魔者を排除すると言う、卑怯な行動である事には変わりない。むしろ、ドーパントの姿で「普通の人間」を襲うと言う行為の方が、卑怯の度合いは上だろう。

……生憎と、こちらは相手の思い描いていた「普通の人間」ではなかったが為に、泥塗れになるくらいで済んだのだが。

「……泥を落としてくる。こんな格好じゃあ、ゆっくりコーヒーも飲めやしないからな」

未だ怒りに燃える翔太郎を尻目に、莊吉は淡々と言い放つと、そのまま洗面所に向かって行く。

歩く度に乾いた泥がはらはらと体から剥がれ落ち、床を汚している。土足可の事務所とは言え、「我が家」とも言える場所が泥で汚れるのは、やはり良い気分ではない。

もう二、三発くらい相手に攻撃を仕掛けておけば良かったと、心の隅で思いつつ、シャワーの栓を捻る。

——今回は退けたとは言え、相手がどんな能力を持っているのかを

見極める必要があるな――

相手は地面に手を付く事で、土人形を生み出した。と言う事は、土を操るという事だろうか。

――いや、おそらくそうじゃあ無い――

すぐさま自分の考えを否定し、再び考える。相手のメモリは「スタチュー」……即ち「像」だ。土人形を生み出したのは、彼のドーパントが持つ力的一端なのではなからうか。

つまるところ、彼のドーパントは、触れた物に人型を与える事ができる……と言う事なのだろう。材質は特に拘らないと言った所か。先程は偶々（たまたま）土が傍にあつたから、土人形を生んだのであつて、木があれば木像を、石があれば石像を、そして金属があればその金属から像を作り出す事が出来ると考えるのが自然だ。

――と、言う事は、風雲寺にある迦楼羅^{カルラ}は、奴が作り出したものと考えるべきか――

迦楼羅の瞳に掘られている「S」は、「Statue」のSと見るのが妥当な線だろう。だが……何故、わざわざそんな事をしたのか。雲夜の様に、見る者が見たらすぐに分りそうな物なのに。

そもそも、迦楼羅を盗み出して何をする気なのか。

転売、という可能性も考えられるが、どうにもしっくり来ない。

何かが荘吉の胸に引つかかる。

体はさっぱりした物の、気分は一向にさっぱりしないまま、彼は翔太郎の待つ応接間に戻っていく。

頭の中に、ある可能性を考えながら……

「翔太郎、お前は他の場所に保管されている像でも、同じ事が起こっていないかを調べてくれ」

「……え？」

食後のコーヒーを嗜みながら、荘吉は何の前触れも無く翔太郎に

向かって言葉を放つ。

言われた方は一瞬、何の話なのか分らなかったらしく、きょんとした顔で莊吉を見返す。

「それって……迦楼羅みたいに、他の像も贗物とすり替えられてるかもしれないって事か？」

「あくまで可能性の話だ」

「だけど……そうだな。迦楼羅だけが狙われてたって言うなら、転売目的ってのが一番に考えられるけど、もしも他の像まで盗まれてたんなら……蒐集家のマニアの仕業って言うのも考えられるもんな」

莊吉の短い答えに、翔太郎は大げさなまでの仕草で顔を上げ、言葉返す。

こういう、ある意味察しの良い部分は、探偵に向いていると思う。実際、翔太郎が言った事は、莊吉も思った事だ。ただ……莊吉の中にはもう1つ、異なる考えもあったのだが……それは口には出さず、ただじっと翔太郎の顔を見つめてやる。

その視線に気付いたのか、翔太郎ははっとしたように口を閉ざす。ぺらぺらと自分の考えを述べるのは、翔太郎の憧れる「ハードボイルド」からは遠いと思ったためだろう。

それでも、莊吉に「任された」事が嬉しかったのか、ほんの僅かに頬を紅潮させ、ニヤリと笑みを返す。

「ああ。任せてくれよ、おやつさん！ この風都は俺の庭だ。早速行つて……」

「……ただし、風都博物館は調べなくていい」

くるりと踵を返した翔太郎の背に、莊吉は淡々と……だが、よく通る声で牽制した。

その言葉に、ドアの前までたどり着いていた翔太郎が、不審そうに振り返る。

風都博物館は、風都美術館の次くらいに美術品の多い場所だ。もしも蒐集家による犯行だとしたら、真つ先に被害に遭っているに違いない。

どうして、と不思議に思う翔太郎ではあるが…… 莊吉の真剣な瞳に気圧されたのか、半歩だけ後退ると、思わず首を縦に振っていた。「分かった。分かりました。風都博物館は除いて良いんだな」

「…… ああ。…… あそこのセキュリティは万全だろうからな」

「…… まあ、確かにそうだよな。風都博物館から展示品を移動したなんて話は聞いた事ないし…… 大丈夫だよな」

取って付けた様な莊吉の言葉を疑いもせず、今度は力強く頷きを返し、翔太郎はそのまま疾風の如くその場を走り去った。

…… その背を見送って、莊吉は「開かずの間」を開く。

翔太郎には「幽霊が出る」と言って、ここには入らないように規制している場所だが、その言はあながち間違いでは無い。何故なら、この場には普段、「存在しないはずの存在」がいるからだ。

「左翔太郎を博物館に近付けさせなかったのは、あの青年を気に入っているからかしら、莊吉？」

響いてくる女の声に、莊吉は否定とも肯定とも取れる曖昧な笑みで返す。

彼の視界の先にいるのは、黒いコートを着た怪しげな女性。コートのポケットに常に両手を入れ、顔は包帯で覆われている。目元はやはり黒いサングラスで隠れており、その表情はうかがい知る事は出来ない。

彼女は…… 今はシユラウドと名乗っている。莊吉とは幼馴染であり、彼にスカルメモリとロストドライバーを渡した張本人だ。

本当の名を捨て、ガイアメモリを世に出している組織に復讐する為に生きている…… と言うのは彼女の言。だが……… 彼女はただ、自分の家族に、幸せな人生を送って欲しいだけなのだろう。何しろその復讐の相手は、彼女の最愛の夫なのだから。

もっとも……… これはあくまで男である莊吉の想像でしかない。女性であるシユラウドの本心を知る日は、おそらく永遠に莊吉には来ないだろう。

「…… 悪いな。お前さんの依頼を後回しにして」

「……………まだ時期では無い。それだけの事よ」

表情は見えない。けれど声音から、彼女が気落ちしている事を察しつつ、莊吉は彼女の手元にあるドライバーを見やる。

色は、自分に渡されているロストドライバーと同じ赤。しかしバツクルの形は「L」を模している自分のものとは異なり、こちらは「W」を模しているように見える。

「そいつがお前さんの言っていた『切り札』か」

「そう。これが私の……………そして、あの子の切り札」

「……………気に入らん。メモリを破壊するには、結局メモリに頼らなきゃならない事が」

「だけど、これしか方法は無い。復讐の為なら、手段を選んではいけない」

ことりとそのドライバーを置き、彼女はぐつと自分の掌を握る。

その様子は、まるで自分に言い聞かせているかのように、莊吉には見える。本音を隠す時の……………そして、それでもやらなければいけないと決意した時の、彼女の癖だ。

なまじ幼馴染であるせいで、そんな些細な癖から彼女の本心を理解できる自分が、たまらなく嫌になる。止めるつもりも無いのに、本心を理解しても……………意味など無いのに。

「だから、幼馴染のあなたをも利用する。……………幻滅したかしら？」

「……………いいや。お互い様だ。それに……………良い女に利用されるのは、男冥利に尽きるってもんだ」

「相変わらず、お世辞が上手ね」

ふ、と笑っているかのように首を傾げながら返す彼女の言葉に、莊吉もニヤリと笑みを返した。

こんなやり取りも、幼馴染だからこそなのだろう。自分の妻以外の女にこんな事を言ったと知られたら、妻はともかく娘が怒るかもしれない。

そう思いつつも、莊吉はキリと表情を引き締め彼女に向き直った。「聞きたい事がある」

「スタチューメモリの事ね」

「……流石に、情報が早いな」

「あのメモリは、その名の通り『像』の記憶を持つメモリ。それ故、触れた物を思う通りに象かたどる事が出来る。しかし、使い手の『想像力』にも左右される……ある意味、最も使いにくいメモリの1つ」

ホワイトボードにきゅつきゅとペンを走らせながら、彼女はメモリの特徴を書き記していく。

「『像』と言う字は『人を象る』と書く。つまり、相手は人型の物しか作る事ができない。けれど、最低限人型であれば済むと言う考え方もできる」

「つまり？」

「基本のベースを人間にさえしてしまえば、材料と想像力のある限り、何でも自由に造れると言う事。ラミアーでもスフィックスでも、それこそ迦楼羅でも」

更にペンを走らせ、彼女は驚異的な速さで異形の絵を描いていく。確かに、その絵に描かれる異形は、人間の部分を多分に含んでいる物ばかりだ。

そう言えば、莊吉を襲ってきた土人形も人型だったのを記憶している。

「逆を返せば、人の形がない物……純粋な犬や猫と言った生物は作る事ができないし、像を作るにはそれと同じ体積の『素材』がいる」
「つまり……素材が無ければ、何も作れない」

「そう言う事」

一通り書き終わったらしく、ペンにキャップをかぶせて彼女はゆっくりと首を縦に振る。

ホワイトボードには彼女が書き殴った文章や絵が全面に踊っている。

「……相変わらず、説明を始めると暴走する女だな、お前は」
呆れたように言いながら、彼はじっとその文字を追う。

そして……「想像力」の文字の上で、その視線が止まった。

莊吉が見た迦楼羅は、殆ど本物と変わらなかった。違う部分と言えば、瞳に入った「S」の文字だけ。

あれ程似た物を作るには、本物をほぼ完璧に覚えている必要がある。普段別の場所にいるはずの隅田に、あそこまで本物に近い迦楼羅を想像する事が出来るだろうか。

その疑問を抱きながらも、莊吉はシユラウドの方に向き直り……

「……この仕事を終えたら、お前の依頼に移るつもりだ」

「……そう」

「そして……『少年』の事は、翔太郎に任せる」

「……何故？」

「もう決めた。まだまだヒョッコだが……あいつは、最強の切り札になる」

独り立ちするまでは、補助をしてやるつもりだが。

そう低く言葉を吐き出し、莊吉は1度だけ彼女の顔を見やる。

包帯の下で、彼女がどんな表情をしているのかは分らない。だが、恐らくは呆然としているのだろうと思う。

翔太郎は半熟だ。だが、それ故にいい影響を与えられると信じている。彼女にとっては不本意だろうが、これは莊吉が決めた事だ。曲げるつもりは無い。

……もつとも、救出の際に連れて行くかどうかは決めかねているが。

「左翔太郎は、切り札にはなりえない」

「お前はあいつを知らない。だが、あいつを知れば、その考えも変わるさ……文音」

「……何度も言うようだけど、今の私は、シユラウドよ」

「何度も言うようだが、幼馴染を今更そんな芸名で呼べるか」

互いにそんな軽口を叩き合いながら、2人は正反対の方向へ向かって歩を進める。

莊吉は事務所の中へ、そしてシユラウドは事務所の外へ。

まるで、それが今生の別れであるかのような空気を漂わせて……

風雲寺の境内。日の出とほぼ同時刻、2人の僧侶が迦楼羅カルラの前に立っていた。

一方は雲夜。そしてもう一方は、ひよろりとした印象の僧侶、光雲だ。

「あの……光雲さん？ 一体、どういったご用件でしょう？」

大きな体躯に似合わぬ、おずおずとした態度で問いかける雲夜に、光雲はフンと鼻で笑い……

「前から聞きたかったんだけどな、お前は何で迦楼羅をそんなに大切に扱う？ ただ古いだけの木像だろ？」

光雲のその言葉に、雲夜は弾かれたように顔を上げる。

その顔に浮かんでいるのは、彼にしては珍しい……憤怒の形相。

そしてその勢いのまま、雲夜は光雲の襟首を掴み、静かな声で言葉を放つ。

「光雲さんには、そうかもしれません。でも、僕にとっては大切な友人……いいえ、親友なんです」

「親友？」

「そうです。仰る通り、迦楼羅は木像です。喋ってなどくれないし、一緒に遊べる訳でもない。だけど……それでも、弱くて、怖がりで、そして優しくなんか無い、そのままの僕を見てきてくれた、たった1人の存在なんです」

ギリと奥歯を噛み締め、雲夜は更に言葉を放つ。まるで、押し殺してきた感情を一気に解放するかのように。

「僕は、寺の息子です。僧侶らしく演じてこなければならなかった」
「……強制された訳じゃないだろうに」

「言葉では、確かに強制しませんでした。でも、態度に出るんです。人に優しく、自分に厳しく……それが『当たり前』だと言われてしまふ。それが、僕には辛かった。迦楼羅は、そんな僕の本音を知っ

ている。唯一僕が僕らしくいられたのは、迦楼羅の前でだけだ」

そこまで言って、雲夜ははっとしたように光雲の襟から手を離す。一方で光雲の表情は全く変わっていない。冷めた、どこか感情を押し殺したような視線を雲夜に向け、静かに雲夜の言葉に耳を傾けている。

「すみません、光雲さん。手荒い真似をしました。でも……それだけ僕は迦楼羅を思っています。彼に何かあったらと、心配でなんです」

「……木像が親友なんて、寂しい奴だな、お前は」

「……そう、ですね。理解してもらえない事もわかっています」
先程までの勢いは消え、雲夜がしゅんと肩を落とす。その様子を見て、光雲はようやくその口の端に、意地の悪そうな笑みを浮かべ……そして、雲夜の額を人指し指で弾いた。

「痛っ」

「俺が迦楼羅の代わりになるとは思わないが……相談事があるなら、俺に言っとけ。これでも多少はお前より人生経験も人脈もある」

「は……？」

言っている意味が分らず、きよんとする雲夜に苦笑を返し、光雲はくるりと踵を返す。

背を向けている為に、光雲の表情が見えなくなるが……差し込む朝日が後光にも似て、妙に神々しく見えた。

「……迦楼羅をもっと色んな奴に見てもらいたい……そう思って隅田の美術館に貸し出す手配をしたのは俺だ。本当にそいつが贗物だつて言うなら、俺もちよつとは責任を感じたりしなくもない」

遠まわしな言い方ではあるが、おそらく彼はこう言っているのだ。自分に手伝える事があるなら言えと。それが分ると同時に、雲夜は光雲に向かって深々と頭を下げ……そして、その気持ちの温かさを目頭が熱くなるのを感じた。

「ありがとうございます、光雲さん」

「礼を言われるような事は言っていないだろうが。……ったく、厄介

事を増やすなよ」

ガシガシと丸めた頭を掻き毟りながら、光雲は雲夜に背を向けたまま声を返し、そのまま部屋を出る。恐らく、中では雲夜が必死に感涙を堪えているだろう。

そんな想像をしつつ、光雲は低く呟く。

「……全く。これを見られなくて良かったぜ。見られたら……更に厄介な事になる所だからな」

乱れた襟を直しつつ、彼はちらりと自分の胸元を見やる。正確には、そこにある、ガイアメモリのコネクタを。

「あの探偵に……銀髑髏に見つかったら、雲夜に見つかる以上に厄介な事になりそうだけどな」

苛立たしげな声とは裏腹に、その顔には奇妙な笑みが浮かんでいる。

まるで、この状況を楽しんでいるかのよう……

日が高くなり始めた頃、隅田の店には招かれざる客がいた。無論、鳴海莊吉と左翔太郎の2人である。

険しい目で見てくる彼らに気圧されたのか、隅田は僅かずつではあるが、後ろに下がって行ってしまう。しかし、店内には当然壁があり、いつの間にか隅田は壁際に追い込まれる様な体勢になっていた。

「な……何なんです！？ 私に何の御用ですか？」

「聞きたい事がある。あんたは、風都中央公園の女神像は知っているな？」

「唐突に何ですか？ まあ、知ってますよ。幼い頃の初恋は、あの女神でしたから。この間、7年ぶりくらいに通りがかったんですが、いやあ、相変わらず美しかったですね」

余程その像が好きなのか、彼はうつとりとした表情で答えを返す。どうやら、幼い頃の初恋と言う話も、まんざら嘘ではなさそうだ。

そんな事を思いつつ、翔太郎はちらりと莊吉の表情を盗み見た。

帽子で隠れてはいるものの、その顔には僅かながらに笑みが浮かんでいる。しかしその笑みもすぐに消え、逆に厳しさすらも感じられる声で、莊吉は言葉を重ねる。

「……じゃあ、本題だ。あんたが最後に迦楼羅像を触ったのは、いつだ？」

ゆっくりと、しかし妙な迫力を持って問いかける莊吉に、隅田はひいと小さな悲鳴をあげ、必死の形相で考え込んだ。

「えーっと、えーっと……最後に触ったのは、確か……そう、彩雲さんに返した時ですよ」

ポン、と手を打ち、隅田は引き攣った笑みで答えを返す。それを聞き、今度は翔太郎が問いかける。

「その時、あんた……素手で触ったかい？」

「は？ そんな事する訳無いでしょう！？ だって、美術品ですよ！？ そんな……手の脂で木像が傷んだらどうするんです！？」

目を丸くし、悲鳴……と言うよりは怒声に近い声でそう言い返すと、今までの怯えはどこに消えたのか、きつく2人を睨み返して反撃と言わんばかりに矢継ぎ早に言葉を吐き出した。

「大体、何故そんな事を聞くんです？ まさかあなた方の言う『贋物』から私の指紋が出た、とか言う気では無いでしょうね？ だってそれはありえません。私は美術品を触る時、決して素手では触らないよう心がけておりますから！ カマをかけるつもりだったのなら、当てが外れましたね！」

一息に吐き出したせい、そこまで言い切ると隅田はゲホゲホとむせ返る。どうやら気管に唾でも入ったらしい。

だが……隅田の勢いに圧される事無く、莊吉はゆっくりと帽子の鍔を目元まで押し下げ、ゆっくりと首を縦に振った。

その行為の意味が分らず、咽ながらも隅田はきょとんと不思議そうな顔をして……それに対して説明をするためか、翔太郎が口を開いた。

「安心しろ。俺達はあるたを疑っちゃあいない」

「……へ？」

まさか、そんな事を言われるとは思っていなかったのか。隅田はきょとんとした表情で莊吉と翔太郎の顔を交互に見やり……やがて安心したのか、へなへなと接客用の椅子に座り込み、掌をじつと見つめた。

彼の見つめる右の掌には、最初に莊吉が気付いたコネクタがある。だが、彼はそれを薄ら寒そうに見やりながらぼつんと呟きを落とした。

「……前科のある人間は、なかなか信用を得られません。まして私がかつて働いた罪状は詐欺。そんな人間の営む店に貸していた美術品が、贖物にすり替えられた……そうと知られば、この店は大打撃です」

「だから、あんたはずつと言っていた。『贖物だと騒がれては困る』と」

「はい。それに……過去の過ちとは言え、私はガイアメモリを所持している。壊れていないので、コネクタも消えない」

まるでコネクタの存在そのものが、彼の罰であるかのように彼は頂垂れながらもはつきりと言い放つ。

彼の過去に、何があったのかは知らない。しかし、少なくとも彼はガイアメモリに手を出した事を、心から後悔しているように見えた。

見えるだけで、本音はどうだか分らないのが人間と言うものだが。やがて、隅田はゆっくりと顔を上げ……ポツリと疑問の声を上げた。

「しかし何故、私を疑わないと？ 先程も言いましたが、私は……」

「だから、だ」

「え……？」

意味が分らず、隅田は軽く眉を顰める。自分は詐欺師で前科者。それが理由で疑いから外されたと言うのは、一体どういう事なのか。

頭にいくつもの疑問符を浮かべている隅田の前に座り、2人は彼にもわかるように説明を始めた。

「他にも出たのさ。『贗物の像』が」

「そのうちの1つが、5年前に盗まれ、3年前に見つかったと大騒ぎになった物……風都中央公園の女神像だ」

「なっ!? ああ女神像、盗まれていたんですか!? と言うか、贗物!？」

莊吉の言葉を聞いて、驚きのあまり隅田の目がこれでもかと言わんばかりに大きく見開かれる。

初めて聞く情報で混乱しているのか、隅田の顔は今にも泣き出しそうに見えた。

雲夜にとって迦楼羅が親友と言い切るくらい大切な存在であるのと同様、隅田にとつての女神像もまた、昔の記憶と共にかげがえの無い存在と言う事なのだろう。

それを理解し、莊吉は軽く1つ溜息を吐き出すと、言葉が続ける。「5年前……つまり、お前さんがまだ堀の中の住人だった頃、あの女神は魅力ゆえに何者かに攫われ、そして3年前にひょっこりと帰って来た」

「当時、凄い騒ぎになって、24時間態勢の監視カメラまで付いたけど……あんたはその時、まだ服役中だ。多分、情報は制限されていただろうし……何よりも物理的に、あんたがすり替えられたはずが無い」

翔太郎の言葉が終わるか否かの内に、隅田の肩ががっくりと下がる。

己の疑いが晴れた事は、非常にありがたい。不本意だが、堀の中にいた事が逆に鉄壁のアリバイを作ったと言う事になる。

しかし……同時に、自分がかつて愛しく思っていた像の紛失に嘆きを覚えているのも事実だった。そして……きっと迦楼羅を失った雲夜も、こんな喪失感を覚えたのだらうと、今更ながらに感じられた。

「しかし……何故、素手で触ったか、などと？」

「……ちよつとした確認だ。お前さんが本気で美術商として更生する気があるのかの、な」

そんな答えを返し、莊吉はスツと立ち上がる。問いには、もちろん言つた通りの意味もあつたが……実は莊吉なりの理由もある。

実際、美術品を取り扱う人間は自分の手の脂などの汚れを気にする。売り物を汚してしまわないように、と言う配慮が無ければ、美術商は勤まらないからだ。

実際、隅田は手袋をつけて美術品を扱っている。つまり、「出来る限り美術品を汚さない」事を心がけていると言つても過言では無い。

しかし……莊吉を襲つたスタチュードーパーントは、何の躊躇いも無く地面に手を付き、土人形を生み出した。

変身していた莊吉さえも泥まみれになるような人形だ、ドーパーント本人の手が汚れないはずが無い。

美術品を扱う隅田が、わざわざそんな真似をするだろうか。

そんな風な考えからの問いだが……わざわざドーパーントに襲われたなどと言つ必要は無い。だから、あえて曖昧に言葉を濁したのだ。「……俺達はもう行くが……最後に、お前さんの持っているガイアメモリを見せてもらつてもいいか？」

「ええ。と言うか、持つて行つて下さい。私には……必要ありません」

そう言つて隅田が差し出したメモリは、真ん中に「M」と書かれたメモリ。恐らく出回っているメモリの中でも、特に数の多いメモリ……「マスカレイドメモリ」だ。

それを受け取ると、莊吉は再び口の端に笑みを浮かべ……くるりと隅田に背を向け、歩き出した。

……今回の犯人のいる、風雲寺へと。

「お前さん、1人か？」

莊吉に声をかけられ、その僧侶はゆつくりと振り返る。

背はひよろりと高く、どこか皮肉気な笑みを浮かべている彼は、まるで莊吉が来る事を予期していたかのように笑った。

「何だ、昨日の今日で来たのか？ 探偵つてのは随分と暇なんだな？」

僧侶……光雲はせせら笑うと、手元の箒を近くの木に立てかけ、口の端を歪める。

「……もう1人はどうした？ 置いてきたのか？」

「翔太郎なら雲夜の所にいる」

「あ、そう。まあ、それなら厄介事にはならなくて済みそうだな」
グイと伸びを1つしながら、光雲はフンと鼻を鳴らす。

確かに、この場に翔太郎がいたら、この悪人めいた僧侶と喧嘩……果ては殴り合いになっていただろう。雲夜の「足止め」を頼んできて正解だったと思いながら、莊吉はスイとその目を細めた。

「お前さん、昨日も言っていたな。『厄介事を増やすな』と」

「何だ、聞こえてたのか？ 割と小声で言っただつたんだけどな」

クツクと喉の奥で笑いながら、光雲は足元の石を莊吉に向かって蹴り飛ばす。だが、莊吉はそれを軽くかわすと、ゆつくりと光雲に向かって足を進めた。

まるで、彼を追い詰めるかのように。

しかし光雲の方は、ニヤニヤと妙な笑みを浮かべるだけで、身じろぎ1つせずに、白いスーツの男を見つめるだけ。

「お前さんは知っていたな？ 迦楼羅が贗物だ、と」

「……まあね。雲夜程じゃあ無いが、俺もあの像とは長い付き合いだ。瞳に掘られた『S』には気付いていたさ。お前は気付かなかったのか？ 彩雲」

言つて、光雲は莊吉から視線を外し……堂の陰に隠れていた童顔の僧侶、彩雲へとその顔を向けた。

言われた方は、まさか気付かれているとは思っていません。ぎよつとしたように目を開き、パクパクとその口を開けたり閉じたりしている。

そんな彼に、光雲は呆れたような溜息を1つ吐き出し……

「お前、隠れるの下手すぎ。気付かれないと思ってる方が間違いだぜ？」

「申し訳ありません、光雲さん。盗み聞きなどする気は無かったです……」

彩雲は一定の距離を開けて、おずおずと2人の前に姿を見せた。風邪でもひいているのだろうか、しきりに押さえては、ずるずると涙をすすっている。

「……鼻をどうかしたのか？ 赤いようだが？」

「あ、いや……ちよつと風邪をひきまして。言っても12月ですし」
「莊吉に問われ、苦笑混じりに答えを返すも……決して彼とは目を合わせないようにしているのが見て取れる。」

昨日の憎らしさはどこへ行ったのか、今日の彩雲は妙に落ち着きが無い。

「そう、か。俺はてつきり誰かに蹴られた痕かと思っていたが……」

「例えば、俺に」

「な、何を仰っているんです？ これは風邪です。決して、あなたに膝蹴りを喰らったからとか、そんなじゃありません！」

あまりにも慌てていた為なのか。彩雲は迂闊にも、口を滑らせてしまっていた。

「……スタチュード・パントが、自分である、と。」

「な……何ですか、その目は……」

「気付いてないのか彩雲。テンパリ過ぎだろ」

「え？」

「お前さんは今、『膝蹴り』と言った。だが、俺は『蹴られた』としか言っていない。つまり、お前さんは俺に蹴られた事を認めているのさ」

呆れたような2人の声に、彩雲の体がビクリと跳ねた。

あまりにも迂闊な自分を呪っているのか、きつく唇を噛み締め、悔しげに莊吉を見ている。それこそ、溢れんばかりの殺意をこめた目つきで。

「折角……折角、ここまで上手く行っていたのに」

「はあ？ どこが上手く行ってたんだか。穴だらけすぎるだろ」

彩雲がようやく声にした一言を、光雲が鼻で笑いながら一蹴する。しかしその言葉は、やはり彩雲の神経を逆撫でするだけの物で……今度は光雲に対して殺意を向けたのを、莊吉は感じ取った。

しかし光雲は己に向けられたそれに気付いていないのか、やはりせせら笑うかのような表情のまま、わざとらしく溜息を吐き出し……
「全く。厄介事を増やすなよ彩雲。ほら、さっさと本物を返して、この一件を終わらせる」

光雲が、そう言った瞬間。

彩雲の顔が、醜く歪んだのを、莊吉は見た。光雲も同じ物を見たのだろう、軽く眉を顰め、返せと言わんばかりに差し出していた手を引っ込める。

彩雲の小柄な体はぶるぶると震え、いつの間にか手の中には茶色っぽいガイアメモリが握られている。

「嫌です。私の邪魔を……しないで下さい！！」

——Statue——

泣き喚くような声と共に、ガイアメモリから電子音……ガイアウイスパーが響く。

そして彩雲はすぐさまそれを自分の右腕に挿し……その姿を、スタチュードーパントへと変貌させた。

『邪魔をするなら死んでください！ 本物を返す？ 何を馬鹿な事を！！』

言うが早いか、彩雲……スタチュードーパントは、自分の脇にあった灯籠に触れ、それを風神像に変えた。

『私が作り出した像こそが本物！ その証拠に、すり替えても誰も

気付かない！ 私の技術が……それこそが本物だと言う証のはずです！！」

繰り出される石像の拳を交わしつつ、莊吉は光雲を守るようにして自分の背後に回す。守られている方は、ドーパントの姿を忌々しげに見つめ、ちいと大きな舌打ちを1つしている。

正直、ドーパントと戦う際に誰かがいると足手まといだ。どこか相手から離れた場所でじっとしていてもraithたい。

そんな莊吉の、焦りにも似た感情に気付いたのか、光雲はポンと彼の肩を叩き……

「アレは、あんたに任せた。俺は……あんたの助手さんと一緒に、本物を探しておいてやるよ」

そう言うのと、莊吉の答えも聞かず、光雲は素早い身のこなしで莊吉達の視界から消える。

随分と逃げ足の速い男だ、と思う反面、その行動力に軽く感謝をし……

その腰に、ロストドライバーを装着する。そして、その一瞬後。「変身」

——Skull——

ひゅおお、と泣き声にも似た風の音と、あの世から聞こえてくるような低い音楽がドーパントの耳に届く。同時に莊吉の姿が、銀の骸骨……スカルへと変じたのが見て取れた。

闇を纏ったような漆黒の体、つるりとした銀の髑髏は人間の行き着く先を示しているのか。首からたなびく白いマフラーはまるで聖骸布。唯一残された白のソフト帽だけが、生きている者を連想させた。

銃を持った銀色の死神は、ゆっくりと右手を挙げ……自分に向かって指差すような仕草をとると、一言だけ呟きを落とした。

「さあ、お前の罪を数えろ」

静かに落とされた言葉の意味を考えるよりも先に轟音が響く。それが、自分の生み出した風神像が破壊された音だと気付くや否や、

ドーパントはひいと悲鳴をあげる。

ただ、自分の作品を見て欲しい、誉めて欲しい。……最初はそれだけだった。この力を手に入れた時、ほんの遊び心で盗まれた女神像を再現した。

……それが、そもその始まりだった。

再現した女神像を見て、人々はそれが「帰って来た」と喜んだ。沈んでいた街の人々を元氣付ける事ができたと自信を持った。

それからだろうか。もっと見て欲しい。あんな物よりも、自分が作った物の方が何倍も良いに決まっている。そんな風に驕るようになっていた。

……それが、彼の自身の罪であると気付かずに。

『私の作品こそが、本物なんです！ 誰も気付いていないじゃないですか！ だったら……全部私の作品に置き換えても、良いじゃないかああああっ！』

なりふり構っていらなくなったのか、ドーパント……否、彩雲はそう叫ぶと、周囲にあるもの全てを……自分自身すらも取り込み、巨大な「ふうとくん」の像を作る。

本来なら愛らしい顔をしているはずのその顔は、彩雲の感情を反映しているのか、般若の如き面相でスカルを踏み潰そうと襲い掛かる。

「やれやれ。節操の無い奴だ。だが……この程度なら、怪物マシンを呼ぶまでも無い、か」

スカルは冷静にその攻撃をかわしつつも独り言のようにそう呟くと、手元の銃……スカルマグナムで相手の足元を打ち抜いていく。

「ふうとくん」は愛らしい姿形をしているが、頭が大きく頭身も低い。こう言った相手の場合、足元が安定しない事が多い事を、スカルは経験上知っている。

実際、足を打ちぬかれた「般若ふうとくん」は、ヨタヨタとよるめき情けなくもズドンと尻餅をついてしまう。

——私が本物……本物なんだ……——

「般若ふうとくん」の中核で、彩雲は思う。

だが……それは果たして、彩雲自身の思いなのか、それとも彼を飲み込んだメモリの悪意なのか。

そのどちらだったとしても、スカルはやるべき事は変わらない。

そう言わんばかりに、彼は自分のメモリをもう1度鳴らす。

——Skull——

——Maximum Drive——

ベルトのマキシマムスロットと呼ばれる部分にメモリを挿し込むと同時に、スカルの胸部からは骸骨に似たマークを象ったエネルギーが放出され、「般若ふうとくん」の胸部で止まった。

『嫌だ……私は、まだ……まだ、誰からも認めてもらっていない……！』

「……なら、『自分自身』で勝負すべきだったな」

す、と帽子で目線を隠し、スカルは悲鳴にも似た彩雲の声に静かに答える。

同時に、彼は容赦なく宙に留まっているエネルギーを蹴り飛ばし……そして、「ふうとくん」はその場で轟音と共に四散した。

中核を為していた、スタチュードーパントが、メモリブレイクされた事によって。

それを見届け、スカルは自身の変身を解き、くるりと踵を返し、翔太郎達がいるであろう本堂へとその足を向け……数歩進んだ所で、その足を止めた。

莊吉の視界に、物置のようなものが入ったからだ。そんな所に盗品があるとは思えなかったが、彼はその物置をゆつくりと開ける。

そして……見つけた。迦楼羅をはじめとする、「すり替えられた像」達を。

すり替えた後も、恐らく彩雲は丁重に扱っていたのだろう。塵1つ無いそこには、像達が綺麗に並べられている。

それを見て、莊吉は思う。彩雲もまた、この像達を愛していたのだと。

——尊敬するあまりの暴走、か——

彼らを愛していたが故に、追いつきたかったのかもしれない。それが今回の暴走につながったのだらう。だがその結果……誰かが悲しむと言う考えに、到らなかっただけで。

唯一「女神像」だけが存在しないのは、それだけは本当に彩雲が「再現しただけ」だったからか。つまるところ、女神は、未だどこかの誰かに攫われたままと言う事か。

しかし、本物の女神を見つけ出す事は、莊吉の仕事では無い。無論……迦楼羅以外に関しても同じ事が言える。

その為、迦楼羅像だけを手に取り、莊吉は改めて己の依頼人の下に向かう。

本堂の前には、先の轟音を聞いて飛び出たらしい翔太郎と、心配そうな顔の依頼人の姿があった。

「おやっさん！ 何だったんだよ、さっきの音！？」

「……ふうとくんが転んだ、それだけだ」

「いやいやいや！ 無いだろ流石に！」

「それより……雲夜。取り返したぞ。お前の相棒を」

そう言つて、本物の迦楼羅を雲夜に差し出した瞬間。

ぽたり、と晴れているはずの空から雨粒が落ちた。

その雨粒は、まるで狙い済ましたかのように迦楼羅の目元に落ち

……まるで、木像が泣いているかのように、木で出来ている肌に、

一筋の跡をつけて流れ落ちる。

——お前さんでも、泣く事があるんだな……迦楼羅——

雲夜に会えた嬉しさで、泣いているように見える迦楼羅と、迦楼羅に会えた嬉しさで号泣する雲夜を軽く見つめて。

莊吉は翔太郎を連れて、そつとその場を後にする。

「さあ、帰るぞ翔太郎。……次の依頼人が待っている」

「……ああ。分かつてるぜ、おやっさん」

貰い泣きしたらしい翔太郎の声を聞きながら、莊吉はまた日常の中へと戻って行った……

メモリブレイクされた後、今回の元凶である彩雲は逃げていた。と言っても、相手は警察ではない。莊吉でもない。

彼を追う者、それは……

——Garuda——

「ひは、はぁ……ひいっ！」

ガイアウイスパーが聞こえたと同時に、彩雲の眼前に1人のドーパントが立ち塞がる。

大きく広げられた羽根、鳥の頭を持ち、体は人間。彼が歩く度に、足元から蛇のような生き物がぞろぞろと蠢いているのが見て取れた。『……馬鹿だなあ、お前。模倣だけで我慢しとけば良かったのに』

「ふぁ……うぁぁ……そんな……そんなぁっ!？」

ドーパントの声は、呆れているように聞こえる。だが……その奥底に秘められた怒気に、彩雲は気付いていた。

ゆつくりと自分に向かって伸ばされる手を払いのけ、恐怖でもつれる足で何とか逃げようとするも、すぐに相手は自分の前に降り立ち、逃げ道を塞ぐ。

『お前は雲夜から『親友』を引き離れた。その罪は重い。例えばあの銀髑髏が許しても、俺が許さない』

「ひ……ひいやぁぁ!？」

かすれたような悲鳴が口から漏れる。だが、それもすぐに首を締め上げられた事で途切れてしまう。

もはや、彩雲の口から漏れるのは、苦しげな喘ぎ声だけだった。恐怖でぐちゃぐちゃになった顔は、呼吸の出来ない苦しみで更に歪み、口は酸素を求めてパクパクと動く。小柄な体は思い切り持ち上げられ、自分の全体重がドーパントの手、そして自分の首にかかっているのが分る。

何とかその手から逃れようと、手足をばたつかせるが、一向に効果は無い。むしろ、己の体力を無駄に消耗し、余計に酸素を欲する結果に陥ってしまった。

「ぐ……うう、うぐう……」

『罰は、受けないといけないよなあ、彩雲？』

ドーパントがそう言葉を放った瞬間。首を絞めていた手に更に力がかかり……ゴキリと、鈍い音が響いた。

直後、彩雲の体からは力が抜け、ドーパントの手にずっしりとした重み加わる。

完全に事切れた彩雲の体を、まるでトスを上げるかのように上へと放り投げ……そして、口から吐き出した炎で、「彩雲」と言う存在を焼く。

燃え盛る劫火は、一瞬にして彩雲の体を舐め、咀嚼してその姿をただの炭素の塊へと変えてしまった。

それを見届けると、ドーパントは満足気に大きく伸びをして……

『あーあー。全く、だから言ったんだ』

その姿を、人間に戻す。

ひよろりと細い、僧侶の姿に。

「『厄介事を増やすな』ってさ」

そう言つと、口の端に悪人めいた笑みを浮かべ……そして、再び寺へと帰っていく。その途中、何かを思い出したのか。ふと彼は上を見上げ……

「親友は、引き離しちゃいけない……そうだったよな……」

最後に、聞こえないくらい小さな声で誰かの名を呟くがそれは冬の空に吸い込まれて、遠くどこかへと消えて行ったのであった……

こんばんは。

と言う訳で、「Episode SILVER:ハードなS/カルラの見せた涙」はこれにて終了でございます。

……え？ 最後の意味？ えー……まあ、ぶっちゃけた話、実はちよつと次回の「Episode BLACK:戦場のBrave Luck」に掛けようかな的な？ (待て貴様)

さてと、まあそれはさて置き (無視か!?)。今回出てきたオリジナルメモリの説明をやっちゃうんだぬーん (古い)

スタチューメモリ

「像の記憶」を宿したメモリ。触れた物を自分の思う通りの「像」に変えることが出来る。ただし、利用者の想像力に左右されるので、デッサン力などがかなり必要になるメモリ。

使用者は彩雲。元々、仏師として修行をしていたと言う裏設定の関係上、かなり使いこなせていたらしい。

しかし何故最後の最後に作った物に「ふうとくん」を選んだのかは、正直謎。

ドーパントとしての姿は、右手が真鍮 (またの名を黄銅)、左手が青銅^{ブロンズ}、右足が石、左足が石膏、顔の部分が木と、「像になる原材料」から成っている。しかし作者はデザイン能力が皆無なので、正直色合いとかは微妙。と言うか、石と石膏の違いってあるのだろうか？

ガルーダメモリ

幻獣である「ガルーダの記憶」を宿したメモリ。実は初期の設定では、「ガルーダメモリを挿してしまった迦楼羅像が敵」と言う、「物にメモリを挿す」と言う設定を考えていた名残。

使用者は光雲。「親友から引き離す事」をもっとも嫌う為、最後に彩雲を手につけた人。でも罪悪感とか皆無。それは次回に理由が……あるのかもしれない（待て）。

ドーパントの格好は迦楼羅像とほぼ同じ格好だが、歩く度に、迦楼羅なら踏んでいるはずの蛇が、こちらでは逆に放たれる事、そして口から炎を吐いて相手を焼き尽くすとか、ちよつと怖い。イメージは秋乃茉莉先生の漫画、「幻獣の星座」に出てくるガルーダ。

……てな感じでしょうか。

また、今回のサブタイトル……「ハードなS／カルラの見せた涙」に関して。

これは無論、「エス／カルラ」の部分で「スカル」の名を入れておきます。

同時に「S」には「スカル」、「莊吉」、そして「仕事」の頭文字を意味していると言う噂も……

しかも「仕事」は英語で「Work」……つまり頭文字は「W」。
うわ、すげえ！（今気付いた）

それでは、また次回、「Episode BLACK」にて。

Episode BLACK:戦場のBrave Luck (前編)

……西暦1988年10月。その物語は、悲しみと孤独で幕を閉じた……

全てを包み込むような闇の中、宙に浮かぶ真円の月と、台の上で横たわる己の姿、そして同じ様に横たわっている生涯無二の親友の姿だけが、妙に白く浮かんで見えた。

彼は、親友に向かって手を伸ばす。

「信彦」と、彼の名を呼んで。

親友も、こちらに向かって手を伸ばしている。

「光太郎」と、こちらの名を呼んで。

今すぐに彼の手を取らなければ、きっと後悔する。

光太郎はなぜか、そう確信していた。だから必死で手を伸ばす。

その瞬間、頭上に浮かぶ月が翳り始めた。ジリジリと、地球の「影」に喰われていくように。それにいやな物を感じ、彼は更にその手を伸ばす。

それなのに……光太郎の腕は、体は、周囲の闇に蝕まれた様な漆黒に染まり、信彦の体は姿を喰われる月の代わりと言わんばかりの、しろがね白銀の鎧に覆われる。

——信彦……！——

もう一度彼の名を呼ぶが、返事はない。緑色の瞳が、何の感情も無さそうにこちらに向けられているだけ。

そして……「彼」は冷たい声で言う。

『お前は一生苦しむ事になるんだ……。親友の、この信彦を抹殺したんだから……。一生後悔して生きていくんだ』

その声が響いたと思った瞬間、光太郎の視界は闇に包まれ、体は奈落の底へと落下していくような感覚に襲われる。

なのに、落ちる感覚は終わらない。

永遠に……終焉の無い落下は、彼に対する罰なのか。

——俺が、信彦を殺した——

——俺が、この手で——

助けようと伸ばしていた両の腕は、いつの間にか朱に染まっている。

それは、自分が殺してしまった、親友の血。

伸ばした腕は行き場をなくし、月は完全に影に吞まれて姿を隠す。落ちる闇に浮かぶのは、闇と同じ色をした、飛蝗のような外観を持った己の姿だけ。赤い2つの瞳だけが、その闇の中でぼんやりと浮かんでいる。

彼は親友殺しの罪を負い、そして孤独と言う罰を与えられたのだ。そう理解すると、彼は自分の頭を押さえ……………

「あ……うわああああああつ!!」

絶叫に近い悲鳴を上げ、彼……南光太郎は思い切り布団を跳ね上げ、飛び起きる。焦点の定まらぬ瞳で周囲を見回し……今まで見ていたそれが、夢であったと理解するのに、少々の時間を要した。

——また……あの夢か——

ぐいと無意識に拭った額には、じつとりと嫌な汗が滲んでおり、脳裏にこびりついた悪夢の残滓のせいか、体はカタカタと小刻みに震えていた。

彼の「敵」……秘密結社ゴルゴムが崩壊してから一月程経つが、未だに光太郎は悪夢に魘されていた。

無二の親友である秋月信彦と共に拉致され、体内に「キングストーン」を埋め込まれ、「ヒトにあらざる者」に改造された事が、つい昨日のように思い出される。

幸い自分は、人格を変えてしまう「脳改造手術」を受ける前に助け出された事から、自分の心は人間のままだった。だが……取り残された信彦は、違った。

ゴルゴムに捕えられたまま、自分の敵として立ちほだかった。

否、「捕えられた」と言う表現は、もはや当てはまらないだろう。彼は完全にゴルゴムに与していた。

……信彦の記憶を持っていながら、全く違う人格……冷酷無比な「世紀王」シャドームーンとなつて。

彼は自分に埋め込まれたキングストーン……「太陽の石」と呼ばれるそれを狙い、手に入れて、ゴルゴムの指揮者にして世界を牛耳る存在、「創世王」になろうとしていた。

戦いたくない。だけど、戦わなければならない。

ジレンマを抱え、人を、地球を守る為に、彼はゴルゴムと……シャドームーンと化した親友と、文字通りの死闘を繰り広げた。

……そして。結果として、光太郎はシャドームーンを倒した。

——親友の、この信彦を抹殺したんだからな——

その最期の際、微かな笑い声と共にかけられた呪詛は、孤独な彼の心に根付き、夜毎に彼を苛む。

自分の手が、親友の血に塗れる夢を見る。

救いたいと伸ばしていた両腕が、いつの間にか殺す為の腕になっている。夢を見た直後は、親友を抹殺し、のうのうと生き長らえている自分への嫌悪感で吐き気がする。

眠れない夜が続いていた。それでも倒れないのは、図らずもゴルゴムに改造された超人的な力のせいだろう。

今日ももう、眠れそうに無い。こう言う時はバイクを走らせる事にしていた。

……その時だけは、何も考えずに済む気がしたから……

誰もいない山間の道を走っている最中、その声は唐突に光太郎の耳に届いた。

——誰か、助けて——

超感覚とも言える聴覚に訴えてきたその声は、確かにそう言って

いる。声から察するに、子供だろう。

慌ててハンドルを切り、その声のした方に向かう。

それ程遠くは無い事を悟りながらも、光太郎は言葉通りバイクを飛ばしてその声の主を探す。助けを求めている以上、それを無下にすることは出来ない。

殆ど本能にも似た使命感を抱きながら、彼は目を凝らし……そして、見付けた。１キロメートル程先の崖に、必死に落ちまいと崖にしがみつく小柄な少年と、その少年の手を掴んで引き上げようとするひよろりとした印象の少年。

悲鳴をあげているのは、支えている方の少年だった。

落ちかけている少年の方は、既に体力の限界に近いのか、ゆつくりと……だが確実に、崖下に向かって後退している。それを引きとめようとしている少年の体力も尽きかけているのだろう、握っている手がぶるぶると震えていた。

「誰か……誰か助けてくれよ！ このままじゃ、シンが落ちる……！」
悲鳴にも怒声にも聞こえる声で叫ぶ少年。そして、その瞬間。

２人の手が、ずるりと滑り……離れた。

「あ……」

一瞬、何が起こったのかわからなかったらしい。支えていた方の少年が呆けたような声を上げ……その直後、その顔が表現しえぬ形に歪む。強いて言うなら後悔と絶望と悲しみと憤怒を一遍に表現したような……

支えを失った方も、悲しそうに顔を歪めて崖下へと落ちていく……

……その直前。

間一髪で間に合った光太郎の手が、しっかりと少年の腕を捕えていた。彼の後ろでは、乗り捨てられ、道路に転がるバイクの無残な姿があったが。

「……良かった……間に合って」

ほつ、と軽く息を吐き出しながら、光太郎はそのまま少年を引き上げる。

そこでやっと、自分が助かったと気付いたらしい。引き上げられた少年は、きょとんとその目を瞬かせ……そして、今になって恐怖が蘇ったのか大声で泣き出してしまふ。

それにつられたように、引き上げようとしていた方の少年も、自分の手を見つめながら、大声で泣き出し、助かった方の少年の体をぎゅっと抱きしめた。

まるで、そこに存在している事を確かめるかのように。

「良がっだよおお、シンが無事で、良がっだあああ」

「コウ、ご免ねええ！ ごわがっだよおお」

「馬鹿あああ、いなくなったらどうしようかと思っただらあ」

子供特有の、涙でぐしゃぐしゃになりながら、2人は互いに気を遣いながら、大声で泣き続ける。

そんな2人を、ほっとしながら光太郎は見つめ……思う。

……この2人の両親達は、一体何をしているのだろうか、と……

しばらくして泣き止んだ2人の子供は、光太郎を見上げ、深々と頭を下げた。

「シンを助けてくれて、ありがとう。……バイク、ぶっ壊れちゃったけど」

「本当にありがとう、お兄ちゃん」

子供は切り替えが早いと言うが、本当にそうだと思う。先程までのぐしゃぐしゃの顔とは打って変わり、今は晴れやかな笑顔をこちらに向けている。

「少年」と表現してはいるが、正直な話、「子供」と言う表現の方が正しいかもしれない。四捨五入して、ようやく二桁になるかならないかと言う年齢に見えるし、実際そうなのだろう。

「いや、無事でよかったよ。僕は南光太郎。君達の名前は？ それに……お父さんとお母さんは一緒じゃないのか？」

視線の高さを2人に合わせつつ、光太郎は気になっていた事を問

いかける。

「俺はコウ。で、お兄さんが助けてくれたのはシン。俺、今はシンの家で世話になってるんだ」

「お父さんとお母さんは、今日はお仕事で家にいないんだ。だから、夜の探検に出ただけど……」

「何を間違ったのか、落ちかけたって訳。……全く、本当にシンは厄介事を増やすんだからなあ」

コウと名乗った少年が、呆れたようにもう1人の少年……シンに向かつて言う。

コウはひょろりと背が高く、気が強い兄貴分と言う印象を受ける。一方でシンは小柄ながらも好奇心旺盛な弟気質と言った風だ。話から察するに、兄弟では無さそうだが……親戚なのだろうか。

「シンの家で世話になっている」という言い方に少々引っかかりを覚えるが、光太郎はそこをあえて聞くような事はしなかった。

彼自身、両親を幼い頃に亡くし、父の親友であつた秋月家に引き取られ、信彦とは兄弟のように育ったからだ。

「厄介事って何だよお！ コウだって賛成してくれたじゃないか！」

「馬鹿、お前が探検に行きたいって駄々をこねるからだろ？ ホント、シンって子供っぽいよな」

「うー……同い年の癖にい」

恨みがましい目でシンはコウを見やりながら、それでもどこか楽しそうに会話を交わす。

光太郎の存在など、すっかり頭から抜け落ちてしまっているかのように。一方のコウは、やれやれと子供らしからぬ態度でシンを一瞥すると、ちらりと光太郎の方を見やる。

何かを企んでいるような、そんな色を浮かべて。

「……なあ、シン。どうせ探検するなら、大人と一緒に行った方が良いんじゃないか？」

「え？ でも、お父さんもお母さんもないし……そもそも、あの洞窟に行っちゃ駄目だって言われてるだろ？」

「はあ。シンって本当に鈍いな。ここにいるだろ？ 大人の人」
じつと光太郎を見つめながら言うコウに、シンもその言葉の意味を理解したらしい。ああ、と大きく頷いて、光太郎の手をはっしと掴んだ。

若干話にはついて行けていない光太郎でも、何となくだが分る。

……どうやらこの2人は、これからの「探検」の保護者に、自分を選んでらしい事を。

もしもここで彼らの探検とやらに付き合わなかった場合。彼らはきつと、先程のように子供だけで、話に出てきた「洞窟」とやらに向かうつもりだろう。しかし、その場合先程の様な危険も、当然ながらついてくる。

仮に、ここで彼らを諭して家に帰したとしても、子供特有のバイタリテイで同じ事を繰り返すに違いない。今度も助かるとは限らないのだ。

……となると、必然的に光太郎は彼らの要求を呑む事になる。

——どうせ何もやる事も無い。今日はもう……眠れない——

ふと心に翳りを感じながらも、彼はそれを表情には出さず……呆れたような溜息と共に、にこやかな笑顔で頷きを返す。

「分かった。僕も、コウ君とシン君についていくよ」

「やった！ 良かったね、コウ！ ありがとう、光太郎お兄ちゃん！」

「ああ。本当にありがとう、光太郎兄さん」

光太郎の答えに満足したのか、2人は嬉しそうに笑いあい、彼の顔を見上げる。全く似ていないはずなのに、その顔は双子を錯覚させるほど似ている気がして……つられたように、光太郎もその目を細めていた。

「あんまり、無茶はしないでくれよ、2人とも」

「……猛スピードのバイク放り出して、僕を助けに入るのは、無茶じゃないの？」

苦笑混じりに言った光太郎に、シンの冷静なツツコミが入る。

今まで忘れかけていた事だが、シンを助ける為にバイクは少々……
…と言うか、かなりお陀仏に近い状態。ガソリンが漏れていない事が救いだが、フレームやタイヤ、マフラーなどは完全に修理の対象だろう。

乗って帰ろうものなら、すぐに警察に止められるに違いない。良くて整備不良、最悪ひき逃げ犯辺りに間違われそうだ。

ああ、と心の中で深い溜息を吐き出す光太郎を他所に、コウは冷たい視線をシンに向け、子供らしからぬ表情をつくって言葉を放つ。
「シン、突っ込むな。厄介事が増える。それと、光太郎兄さん」

「……ん？」

「俺達の事は、呼び捨てにしてよ。君付けで呼ばれるの、嫌いなんだ」

「熊の化物？」

「うん。あの洞窟に、化物が出るって。噂になってるんだ」

目的の洞窟が見えてきた辺りで、光太郎は2人から「探検する理由」を聞いていた。いや、「聞いていた」と言うよりは、「聞かされていた」と言った方が正しいかもしれない。

誇らしげに、そして楽しげに。コウとシンは鼻歌混じりに道を歩きながら、光太郎に向かって目的地に纏わる話をしていた。

勿論、殆どが眉唾物……例えば、入り口近辺には謎掛けの獣がいて、答えられないと食べられてしまうとか、近くの森では夜になると首なし武者が歩き回って首を探しているとか、そもそも洞窟の中には大昔の海賊が隠した金銀財宝があるとか……

その中で、妙に光太郎の胸に引っかかったのは……洞窟の中に、熊みたいな化物がいると言う物だった。

その話になった瞬間だけ、コウの顔が引き攣ったように見えたのも手伝って、思わず鸚鵡返しに聞き返していた。

「……最近、この辺の人も見かけるらしい。熊の化物が、夜な夜な

人間を攫って喰ってるんだ、って」

「実際、最近どこに行ったか分らない人が多いんだって。だから、僕とコウで退治しようって話になったんだ！」

「退治、ねえ。お前に出来るのかよ、シン？」

「出来るよ！ いざとなったらこの木の棒でやつつけてやるんだ！」
いつの間に拾ったのか、子供が持つには大きくて重そうな木の棒を構えて、シンは意気揚々とそんな言葉を吐き出す。

しかしコウの方は、相変わらず呆れたような視線をシンに向け、やれやれと肩をすくめている。

その、子供らしからぬ仕草に、思わず光太郎は笑ってしまう。

シンが無茶をするから、コウが止める……きっとそう言う関係なのだろう。

……かつて自分と信彦が、そうだったように。

思った瞬間、先程の夢がフラッシュバックする。同時に自分の腕が血に塗れているような錯覚に襲われ、思わず足が止まった。

そんな彼の心の隙をつくように、既にこの世にはいないはずの声が光太郎の鼓膜を叩き、幻影は白銀の戦士ではなく、見慣れた人間としての顔で網膜に映る。

——お前は一生苦しむ事になるんだ——

「やめろ……」

——親友の、この信彦を抹殺したんだからな——

「やめてくれ……」

——一生後悔して生きていくんだ——

「やめてくれえええっ！」

「光太郎お兄ちゃん!!」

「お兄さん!？」

その場に膝を付き、頭を抱えて絶叫する光太郎を訝しく思ったのか。シンが心配そうに光太郎の顔を覗き込み、コウが肩を揺さぶる。そのお陰で、幻影は消える。だが……体の震えは収まらず、膝はがくがくと笑って立つ事ができない。呼吸も、先の絶叫のせいなの

か随分と粗くなっているのが自覚できる。

「どうしたの？ …… ひょっとして、怖いのか？」

何の気なしに聞いたのである。うシンの言葉を、光太郎は心の中で反芻する。

怖いのか。

その通りだ、自分は怖がっている。

親友を殺してしまった自分を、そして襲いかかる罪悪感を、恐れている。

このままではいつか、自分が壊れてしまうのではないかと。壊れて…… やがてその想いは、自分が守ったはずの「人間」に向くのではないかと。

だから、素直に頷く。自分は、「怖い」のだと。

それを、違う意味でとつたらしい。シンはきやらきやらと笑い、コウも珍しく軽く声をあげて笑った。

「お兄ちゃんでも、洞窟は怖いんだね！ 僕だけじゃなくて、ちょっと安心した」

「あつはは！ 何だよ、光太郎お兄さん、腰抜かす程怖いのかよ？」

「あ…… いや、そうじゃ……」

違う、と言いかける光太郎を無視し、2人の子供はきやつきやと楽しそうにはしゃぐ。恐らく、本心では彼らも、洞窟に向かうのが怖かったのだろう。しかし、光太郎が絶叫し、立てなくなる程「怖がった」を見て、安心したのだ。

そう認識すると同時に、光太郎は深い溜息を1つ吐き出し……にっこりと笑って立ち上がった。

「…… ありがとう、心配してくれて。でも、2人がいるお陰で、怖いのも吹き飛んだよ」

「本当かよ？ ま、俺は最初から怖くなんか無かったけどな」

「えー？ コウは嘔吐く時、ちよっと目が泳ぐんだよね」

「はあ？ 嘘なんか吐いてないし！ って、待てよ、シン！」

「あつはは！ 早くしないと置いてくよー？」

「お前はああああ！ 厄介事を増やすんじゃないぞーぞー！」

そんな風は無邪気に笑う2人を追いながら、光太郎はその「怪物のいる洞窟」に向かって足を進める。

そこに、何が待ち受けているのかも知らずに……

皆様、2011年、最初の投稿になります。

寒中お見舞い申し上げます。

不束者ではございますが、本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、始めました「Episode BLACK」。その後のサブタイトルには、深い意味は……多分、無いです (待て)

以前、自分の活動報告内で、そしてあらずじにも申しました通り、この作品の時間軸は「BLACK」と「RX」の間を意識しております。

だから、佐原の叔父さんの家に行く前、と言う設定……だよな、うん (調べるよ)

だからこそ……しつこくしつこく、光太郎の夢にシャドームーンが出て来る訳です。

そんな中、現れました2人の少年……「コウ」と「シン」。
そして「熊の化物」。

彼らがどうこの後関わってくるのか、果たして「前・中・後」で終わるのか (更に待て) !?
そんな感じでお送りしていきたいと思っております。

それでは皆様、本年もご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

Episode BLACK:戦場のBrave Luck (中編)

どこかで水が滴っているのだろうか。洞窟の前までやって来た3人の耳に、水琴窟に似た音が届く。

中は薄暗く、明かりを持っていても不安を煽るであろう暗さを持つており、中から吹きつけてくる風は妙に生温い。

「うわぁ……近くで見ると、大きいなぁ……」

入り口を見上げ、感動したようにシンが口を開く。そしてその次の瞬間、洞窟の奥から何かの唸り声に似た「音」が聞こえた。

怨、と……まるで何かを呪うかのような、そんな音が。

「ひゃあっ!?!」

その音に、飛びあがらんばかりに驚き、悲鳴をあげるシン。その一方で、コウの方は呆れたように笑い……

「何だよシン、こんなの風の音だろ? 本当にお前って怖がりな癖に無謀だよな」

「こ、ここ、怖くなんか……ないよっ!」

コウに馬鹿にされたくないのか、ガタガタと震えながらも、彼は精一杯の虚勢を張る。

……確かに、普通に考えれば今の「音」は洞窟内で反響した風のうねりだと思っただろう。だが……光太郎には、はつきりと理解できていた。

それが、何者かの「声」である事が。

それが、シン達の言っていた「熊の化物」の唸り声なのかまでは分らないが……少なくとも、風の音ではない事だけは確からしい。

子供達だけで来なかったのは、正解だったかもしれない。

無意識の内に顔が引き締まるのを感じつつ、光太郎はそんな事を思う。その変化に気付いたのだろう、シンが不思議そうな顔で光太郎を見上げた。

「光太郎お兄ちゃん。なんか……顔、怖い」

「……ごめんごめん。ちょっと、緊張しちゃってね」

子供のストレートな言葉を受け、慌てて笑顔に戻すと、光太郎は誤魔化すようにその言葉を返す。

自分にとっては「真剣な表情」のつもりだったのだが……子供から見れば、「怖い」と言う風に映ったらしい。

反省と謝罪の意を込めて、シンの頭を軽く撫で……何の気なしにコウの方に視線を向ける。

彼は、洞窟へ視線を向けていた。その顔に、怒りの表情を浮かべて。よく見れば、体は小刻みに震えている。しかし、真つ白になる程きつく握り締められた拳を見る限り、その震えは恐怖から来る物では無いらしい。

子供の小さな全身から、この奥に潜む「何者か」に対する怒りのオーラが発せられていた。

「コウ？　どうかしたのかい？」

「別に。何でもないよ」

光太郎の問いに、コウはぎこちない笑顔を浮かべてそんな答えを返して来る。

口先では「何でもない」と言っているが、その表情を見るに、「何でもない」はずが無い。彼には何かあるのかもしれない。

この奥に潜む「何者か」との因縁が。

「……とにかく行こう。やっと……やっと、ここまで辿り着いたんだから」

そう言つて足を踏み出すコウの後を、シンが慌ててついていく。そんな彼らを追いかけて……光太郎はそつとシンの耳元で囁いた。

「コウの様子が、何だかおかしくないか？」

「うん。何か隠してるよね」

囁きに、あつさりとシンは肯定の言葉を返す。

その事に光太郎は少しだけ驚く。彼は、コウの様子がおかしいと分かっている。その上で、彼の後を着いて行っているのだ。

子供なのに……いや、子供だからこそ、相手が何かを隠している

であろう事を悟ったのだろう。付き合いの長さもあるのかも知れない。

それでも、彼は目をキラキラと輝かせ……そして迷いの無い視線をコウの背中に向け、言葉を続けた。

「それでも、僕はコウを信じてる。僕だけは……信じてなきゃいけないんだ」

「それは、どうして？」

「だって、僕とコウは親友だから。信じるのは、当たり前でしょ？」
にっこりと。

今の光太郎には眩しすぎる笑顔を見せ、シンはそう言い切ると、軽い足音を立ててコウの隣に並ぶ。

そんな彼らの後姿に、何故か嫌な予感を感じながら……光太郎もまた、2人の後を追いかけるのであった。

洞窟の中は、11月とは思えないくらいに暖かった。例えて言うなら、この中で誰かが暖房をガンガンにきかせているような印象だ。

真夏……とまでは言い過ぎだが、それに近いくらいの気温はあるかもしれない。湿度も高い事もあり、妙に体がべたつく。

おまけに……時々だが、妙に甘ったるい香りが漂ってくる事も、不快感を募らせる原因であった。

入り口付近では生臭い……嫌な臭いがしていたのだが、奥に進めば進む程、蠱惑的な香りが漂っている。ほんのりと、ならば特に不快にも感じないのだろうが、あまりにも強烈だと反って吐き気を感じらしい。

コウとシンも、最初こそ嬉しそうにその香りを嗅いでいたが、今では思い切り顔を顰めて鼻をつまんでいる。

「うう……僕、しばらくの間お菓子はいらないや……」

「俺も……」

今にも吐きそうな顔で言う2人の子供を見守る光太郎も、言葉にこそしないものの、ほぼ同じ意見であった。

しかし、この異様な空間に対する懸念の方が大きいのか、あまりこの甘い香りは気にならない。

——臭いが強すぎて、嗅覚が麻痺したのかもしれないな——

そんな事を考える一方で、頭の片隅ではある意味癖とも言える考えが脳裏を掠める。

——まさか、ゴルゴムの仕業？——

だとすれば、子供達をこれ以上にここにいさせるのは危険だ。早めに避難させ、改めて調査した方が良くかも知れない。

そう思った、その刹那。甘い香りが、一気に濃厚になって3人の鼻腔に襲い掛かる。

「うっ……ヤバイ、俺、吐くかも……」

「何これ、気持ち悪い……」

コウは限界と言わんばかりに口元を押さえ、シンは思い切り顔を顰めて非難の声を上げる。光太郎すらも、思わずその香りにむせ返りそうになり、必死でそれを堪えた。

香りが甘すぎて、まともな判断力を失いそうになる。頭の奥がジンと痺れ、くらくらと立ちくらみさえも覚える。

強化された体を持つ光太郎ですら、そんな感覚を覚えているのだ。2人の子供達が、まともでいられるとは思えない。

「くっ……2人とも、ここから出るんだ！」

ふらつく2人の体を支え、何とかそこから退こうとした、その刹那。

奥……即ち、自分達の前方から、大きな影が姿を見せた。

それは、一言で言えば「熊の顔をした異形」。

熊と呼ぶには小柄だが、人間にしては大きい。右手にはどす黒い斑模様に乗った鋭い鉤爪があり、左手からは琥珀色の液体が、ぽたりぽたりと滴り落ちている。

強烈な甘い香りの正体は、その左手からの琥珀色の液体らしい。

妙に生々しい顔からは、熊に似合わぬ鋭い牙が覗いている。

「うわあっ！ 熊の化物……！」

「フン。化物とは酷いな。せめて怪人と言って欲しいところだ」

「しかも喋った!?」

どこかくぐもったような声を出すその存在の登場でぼんやりしていた頭が一気に覚醒したらしい。シンは、大きく目を見開いてその存在を指しながら、悲鳴じみた声を上げる。

コウも、やはり覚醒したらしい。だが、その表情は慄くシンとは対照的に、憎悪に満ち溢れている物だった。

「やっぱり……熊の化物って、お前だったのか……！」

「ん？ 何だガキ？ 俺と会った事でもあったか？」

「ふざけるな！」

腹の底から怒鳴り声を上げ、コウはシンが持っていた木の棒を奪い取ると、そのまま一直線に異形に向かって走り出す。

そのまま、異形を殴りつける為に。

しかしほんの数歩進んだ所で、コウの足は宙に浮いた。

……光太郎に抱え上げられる形で、止められたのだ。

「よしんだ、コウ！ 危険すぎる」

「放せよ！ 放してくれよ、光太郎兄さん！！ あいつだけは、あいつだけは許せない……！」

「何でそんなに……」

「だって、あいつが……あいつが俺の父さんと母さんを殺したんだ……！ 忘れたとは言わせないぞ……！」

叫ぶコウの目尻には、うつすらと涙が浮いている。

その涙は、両親を失った哀しみからか、両親を奪った相手への怒りからか、あるいはその両方からか。

届かない木の棒をブンブンと振り回し、自身を抱える光太郎の腕から抜けようともがくが、しっかりと抱えられている為にそれも叶わない。

そんなコウの姿を見て、何を思ったのか。

異形はフンと馬鹿にするようにせせら笑い、言葉を返す。コウの怒りを更に激化させるような言葉を。

「……さあ？ 忘れたなあ」

「何……だとお！」

「俺が殺した人間なぞ、山程いる。いちいち覚えておらんわ。むしろ、ゴルゴム再興の礎となった事を誇るが良い」

両肩を竦める様な仕草で言いながら、異形……クマ怪人とも呼ぶべきそいつは、ニヤリと口の端を歪めた。

それが、下卑た笑みのようにも見え、余計にコウの……そして光太郎の怒りを煽る。

ギシリとコウが悔しげに奥歯を噛み締める音を聞きながら、光太郎もクマ怪人を睨み付ける。

「クマ怪人……ゴルゴムの残党が、一体何を企んでいる！？ ゴルゴムの再興とは、一体どういう事だ！？」

「フン。南光太郎、貴様は知らずとも良い事だ。どうせここで死ぬのだから」

そう言った瞬間、クマ怪人はその巨体に見合わぬ速さで光太郎との距離を縮める。

慌てて縮んだ距離をもう1度開かせるべく後ろへと下がるが、下がった距離よりも縮む距離の方が長いらしい。そう判断すると、即座に光太郎は抱えていたコウの体を放して向かって来るクマ怪人の鼻頭に向かつて拳を叩き込んだ。

「ぬう！」

鼻は、どんな生物にとっても弱点である。そこを殴られ、くぐもった悲鳴をあげるクマ怪人。

それを見てなのか、小さくガッツポーズを取ったシンとコウの姿が、光太郎の視界の端に入った。

「2人とも、早く逃げるんだ！」

「ぐうう……ガキに感^かじている場合かな！？」

光太郎の気が、シンとコウの2人にそれた、その一瞬で。

クマ怪人は彼との距離を詰め、光太郎の口元を驚掴みにした。

……鉤爪のある右手ではなく、琥珀色の液体が溢れている左手で。

——何！？——

「なあに、簡単に死なせはせん。貴様には味わってもらうぞ……とびきり甘い、悪夢をな！」

光太郎の顔に浮かんだ驚愕に、愉悦混じりの声が返る。自分の後ろでは、心配そうな2人の子供の声が響いている。

しかし……その左手から立ち上る、強烈な香りのせいで、光太郎の意識は朦朧としてくる。おまけにその液体は、僅かにはあるが光太郎の口内に侵入、その強烈な甘さで味覚をも侵略していた。

——これは……蜜か！？——

気付いた時には、既に遅く。

彼の視界はぐにやりと歪み……………

……ふと、彼は顔を上げる。

頭上では煌々と月が輝き、星はそれを飾るかのように瞬いている。周囲はがやがやと楽しいげな声で賑わっており、浮かれた空気が熱を持ってこの辺りを取り巻いている。浮遊感にも似た足元の覚束なさを感じるのは、ここが船の上だからだろうか。人々のざわめきの間を縫うようにして、波の音が耳に届く。

「ここは……？」

訝りながら、周囲を見回す。光太郎の視界に入るのは、ウィングラスを片手に談笑するイブニングドレス姿の淑女とタキシード姿の紳士の姿。

少し離れた所では、ポーカールを嗜む者達もいる。

——どうなっているんだ？ 俺は確か——

先程まで、洞窟の中にいたはずだ。そこでゴルゴムの残党らしき怪人と遭遇して……

そこまで考えた時、何者かが光太郎の肩を軽く叩いて声をかけた。

「パーティーの主役が、ぼんやりと何を考えているんだ、光太郎？」
「え……？」

優しいその声に、思わず光太郎はその身を竦め、ゆっくりと声の主の方へとその顔を向けた。

……そこにいたのは、銀のタキシードを纏った親友。顔に浮かんでいるのは、見慣れた優しい笑み。

「のぶ……ひ、こ？」

掠れた声でようやく親友の名を吐き出し、光太郎はこれでもかと言っくらいに目を見開く。

その声に、そして言葉に。信彦は軽く首を傾げ、心配そうに光太郎の顔を覗き込んだ。

「どうしたんだ、光太郎。熱でもあるのか？ それともまさか、寝惚けているのか？」

「え……？」

ひたり、と光太郎の額に手を当てながら、信彦は茶化すように言葉を放つ。

寝惚けていると言われて、ようやく光太郎は、自分もまた漆黒のタキシードに身を包んでいる事に気付く。右手にはワイングラスに注がれたシャンメリーが、ゆらゆらと美しい波紋を立てていた。

——俺は……何故、この状況で眠ってしまったのだろうか——

今日は自分と信彦の誕生日では無いか。それなのに、どうして自分は眠ってしまったのか。折角信彦の父が、盛大なパーティーを開いてくれていると言うのに。

疲れが溜まっていたのだろうか。慣れない格好をしているから。

そんな風に思いながら、光太郎は先程まで見ていた「悪夢」を頭の片隅に追いやる。

既にその「悪夢」の中身を思い出す事はできないが、それが「悪夢」であった事だけははっきりと覚えている。思い出そうとするだけで、苦しくなる程の悪夢だ。きつと思いださない方が良い。

「……ごめんごめん。少し、ぼんやりしてたみたいだ」

「全く、しっかりしてくれよ、光太郎」

やや照れたように言う光太郎に、信彦は呆れたように言葉を吐き出す。

そのやり取りが、妙に懐かしいような気がするの、光太郎の気のせいだろうか。今朝からずっと一緒にいるはずなのに、もう長い間信彦の笑顔を見ていない気がする。

最近見ていたのは、冷酷無比な彼だった。信彦がそんな表情をするはず無いのに。

だが……何故だろうか。妙な……不安にも似た違和感が、光太郎の胸に湧き上がるのは。

——おかしい——

光太郎の胸の中で、別の自分が疑問の声を上げた。

だが、何がおかしいのかが分らない。信彦はいつもの信彦だ。何もおかしい所は無い。無いはずなのに……違和感が拭えない。

それでも光太郎は、その違和感をあえて無視して信彦の顔を見る。すると信彦は、につこりと笑い……

「今日は、俺達が創世王の座を賭けて殺し合う特別な日なんだから。ほら、お前もこれ持つて」

「……え？」

言いながら、信彦はさも当然のように光太郎の手に剣のような物を手渡す。円筒状で、「斬る」よりも「突く」、「貫く」に特化していると思しきそれは、光太郎の手にずしりと重い。

一方の信彦は、赤い刀身の「斬る為の剣」を右手に持つと、満足気に頷いた。

「な、何を……」

「何だ？ 以前から決まっていた事じゃないか。忘れたのか？」

心底不思議そうに首を傾げながら、信彦はその切っ先を光太郎に向け、躊躇無く刃を振り下ろす。それを持たされていた剣で受け止めると、ギギイと嫌な音が響いた。

その瞬間、ざわめきは止み、周囲の人間達は嬉しげに手を叩いて

2人を見守る。

まるで、この戦いを祝福するかのように。

「信彦、やめてくれ！」

「何故？」

「俺達は親友だろう！？　どうして殺し合わなければならないんだ！？」

いつもと同じ、人の良さそうな笑顔のまま、容赦なく振るわれる赤い剣。それを弾きながら、光太郎は親友に向かって声を上げる。

だが、信彦は決して手を緩めることなく光太郎に鋭い斬撃を繰り返し、ついには光太郎の体を弾き飛ばす。

飛ばされた方はその背を壁に思い切りぶつけ、苦しげに体をくの字に折り曲げ、ゴホゴホと咳き込む。

その隙を突くように、信彦はスツと光太郎の首筋に切先を突きつけ、剣の腹で光太郎の顎を持ち上げる。

先程まで浮いていたはずの月が雲に隠れ、信彦の表情は暗くて見えない。

顎にかかった刃の冷たさと、微動だにしない刃先が完全に己の命を絶つつもりである事を否応無く告げている。

「信彦……」

「親友？　何を今更」

せせら笑いながら、信彦は短く吐き捨てる。

何の感情も感じさせない、無機質な声で。

その声を聞いて、光太郎は思い出す。

……これが、現実ではない事を。

夢だと思っていたものこそが、現実であつた事を。

「あ……」

「現実では、俺を殺したくせに」

すると、雲が途切れて月が再び姿を現す。

同時に、先程まで信彦だったはずの存在は、銀の鎧に翡翠の瞳の戦士に変わっており、自分の姿も漆黒の体に真紅の瞳の戦士に変わ

っていた。

——……を……て……
——……じゃ……いだろ——

小さく、どこか遠くで声が聞こえる気がする。だがその声を掻き消すかのように、目の前の存在は、感情の籠らない声で言葉を紡ぐ。「お前は一生苦しむ事になるんだ。親友の、この信彦を抹殺したんだからな。一生後悔して生きていくんだ」

どこか愉悦すら混じった声で、相手はゆっくりと赤い剣……サタンサーベルを振り上げる。

焼きついて離れない、信彦の……否、シャドームーンの最期の言葉。この一月の間に、幾度と無く聞こえてきたその言葉が、今日は妙に楽しげに聞こえた。

それは、普段とは逆の立場に立つからだろうか。

光太郎……仮面ライダーブラックは、顔をシャドームーンに向けてたまま、全く動かない。動けない、と言った方が正しいのかもしれない。体が動かないのは、これが夢だと、無意識の内に高をくくっているからか。それとも、これ以上苦しみを背負って生きたくないと言っ願望からか。

どちらにせよ、今の彼は斬られるのを待つ罪人のようだ。

——……いちゃん……——

——……さん……——

「ここで死ね、ブラックサン！ 私が創世王となる為に！」

ヒュ、と風切り音が聞こえる。

自分の首を刎ねる為に。

だが……刹那よりも、さらに短い時間の後。
ブラックの耳に、「祈り」が届いた。

「光太郎お兄ちゃん！ 目を開けて！！」

「寝てる場合じゃないだろ、光太郎兄さん！」

——この声は……——

響いたのは2人の子供の声。

この夢を見る前まで一緒にいた、自分達を投影したような少年達コウケンシツ。この悪夢の外にいる彼らの切実な声が、ブラックの体を突き動かした。

夢の中で迎える「死」が、現実でも「死」につながるとは思えない。だが……ここで「死」を迎える事は、現実に対する絶望と敗北を意味する。

1度、シャドームーンに倒された時、誓ったはずでは無いか。……もう2度と負けないと。

だから。

ブラックは手元の剣を拾いあげ、振り下ろされたサタンサーベルを弾き飛ばす。そしてそのまま剣を引き戻すと、から空きになったシャドームーンの胴を……深く、貫いた。

その深さ故に、2人の頬が触れる。

貫かれた相手の体からは、スパークに似た火花がチリチリと散る。

「……また、俺を殺すのか、光太郎」

「信彦……」

これは夢だ。夢だとわかっていても、もう1度、彼は親友をその手にかけている。

それが、今後更に自分を苦しめるのだろう。自責の念と後悔で一杯になって、いつかは自分が壊れてしまう日も来るかもしれない。

それでも……やらねばならないのだ。

……現実で待つ、悲劇をとめるためにも。

仮面の下で、ギリリと奥歯を噛み締め、それでもブラックはシャドームーンの体を斜めに斬り上げ、突き立てていた剣を抜く。

「ククッ……ハハハハハハ！ 良いだろう、それがお前の選択だと言っのなら！ 苦しんで、苦しんで……そして絶望の中で生きるが良い……！」

ゆっくりと背を向け、剣の構えを解くかのように斜めに振り下ろしたブラックに、シャドームーンの哄笑がぶつかる。

だが、それもすぐに消え………光太郎の意識が、浮上した。

「馬鹿な！？目を覚ましただと！？」

最初に聞こえたのは、クマ怪人の驚愕の声。

そして同時に視界に入ったのは、半べそ状態の2人の子供の顔。

「お……起きた……起きたよ、コウ！」

「ああ。……いい大人が、厄介事を増やさないでくれよ！！俺もシンも、心配したんだからな！！」

ドンドンと光太郎の胸元を、精一杯の力で叩きながら、2人の子供は心底ほつとしたように光太郎にすがりつく。

そんな彼らの頭を軽く撫で、光太郎はにっこりと笑う。

「2人が呼びかけてくれたお陰だよ。ありがとう」

そう礼を言いながら、ゆっくりと光太郎は身を起こし……クマ怪人へと視線を向けた。

その顔は憤怒にゆがみ、ギシギシと右手の鉤爪を鳴らしている。

ゴルゴム怪人特有のプライドの高さが、「人間の子供如きに」と言う歪んだ感情を生んだらしい。

「ガキがとんだ邪魔を！もはや容赦はせん！！」

「2人共、下がっているんだ。良いね？」

クマ怪人の怒りを感じ取ったのか、2人はこくりと頷いて近くの岩陰に隠れる。それでも入り口まで逃げ帰らないのは、光太郎を心配する心と……コウの言った、「親の仇」と言う事があるせいだろう。

付かず離れずの距離を保つ2人を確認し……光太郎は、すつと腕を斜めに構えた。

……出来る事なら、誰にも知られたくはない。これは、自分の背負った「業」なのだから。しかし、それでもやらねばならない。

負けないと、決めたのだから。

「変っ身！！」

光太郎の声に反応するように、腰に埋め込まれたキングストーンが反応、その姿を一瞬だけバツタ男と呼べる姿に変えた後、更に姿を変えた。

漆黒の外殻、真紅の瞳。左胸にはゴルゴムを表す蛇と宝玉の紋様。人々の希望の象徴とも言われた、その存在の名は……

「仮面ライダー、ブラック！」

ブラックの声が、洞窟の中で響く。

……ゴルゴムの残党を倒すために……

こんばんは。

本当にあと1話分で終わるのか、甚だ不安になってきました、辰巳です。

……にしても。

BLACKなのに何故出てきた、リボルケイン。

いや、幻だけどね。

BLACKでリボルは駄目でしょう、自分。でも、剣VS剣じゃないと卑怯って言うか？

つかなんで生身でバトル？

いやぁ、色々ツツコミ所満載です。

と言う訳で、今日はこの辺で失礼致します。
ではまた。

「光太郎お兄ちゃんが……」

「仮面ライダーだったのか!？」

変身した光太郎の姿を見て、岩陰に隠れていたシンとコウが、歓喜と驚きの入り混じった声を上げる。逆に、ゴルゴムの残党であるクマ怪人は忌々しげに低く唸ると、鉤爪の付いた右手を振り上げてブラックに向かって突進した。

変身前は思いがけない相手の素早さに遅れを取ったが、今は違う。ブラックは相手の右腕を難なくかわすと、カウンターの要領で自分の右拳を相手の左頬に叩き込む。

「ぬうつ……」

くぐもった声で呻きながら、それでもクマ怪人は体勢を立て直し、今度はその場で左足によるハイキックを繰り出す。しかしその足も、ブラックが後ろに飛び退った事により大きく宙を切るだけに留まり、結果的にクマ怪人の体をくるりと一回転させるだけであった。

その遠心力で、クマ怪人の左手から溢れる蜜の雫が飛び、コウ達の顔に……僅かではあるが、その飛沫がかかった。

「わっ!？」

「うわ、ぺたぺたする」

飛んできた飛沫を拭いながら、2人の子供はそれぞれに苦情の声を上げる。

その声に、クマ怪人がニヤリと口の端を歪めた。まるで、最初からそうなる事を狙っていたかのように。その事に気付いたのか、ブラックははっとしたように2人の方へと振り返ると、鋭い声で注意を促す。

「その蜜は幻を見せる! 気をつけるんだ!!」
と。

だが……その言葉を聞いた瞬間、クマ怪人は高らかに笑った。

それはそれは、楽しそうに。

「何がおかしい!？」

「クツクツク……馬鹿め。俺の放つ蜜が、いつ、『幻覚を見せるだけ』と言った？」

「何!？」

「俺の蜜は相手の神経……特に脳神経に作用するのだよ」

楽しそうに肩を小刻みに震わせながら、クマ怪人はそう言つと、人指し指でトンと自分のこめかみを指す。

正確には、そこに納められている脳を。

「わかるか、仮面ライダーブラック。先程俺は、貴様の視神経と記憶中枢を刺激する事で『幻覚』を見せた訳だが……作用する場所を変えれば、こんな事も出来るのだよ」

その言葉を言い終わると同時に、パキンとクマ怪人が指を鳴らした瞬間。

音に反応するように、コウの体が小さく跳ね上がり、その次の瞬間にはふらりと岩陰から姿を現した。

その行動に驚いたらしい。シンはクマ怪人の元に行こうとするコウを引き戻そうと、彼の腕を両腕で掴み……

「コウ!？ 何やってるんだよ!？ 今出たら危ないよ!！」

「……………邪魔だ。どけ」

引き止めるシンに、低く、感情の読み取れない声で返すと、コウは躊躇無く……そして遠慮なくその手を振りほどき、クマ怪人の側へ歩み寄っていく。

その顔に浮かんでいるのは、人形のような無表情。歩み寄る先は親の仇であるはずなのに、憎悪の欠片も感じられない。

「ほう？ 1人だけか。まあ良い」

ふらふらと自分の足元に歩み寄ってきたコウを見下ろしながら、クマ怪人はそんな言葉を放つ。その顔に、微かな不満が混じっているのは、おそらくシンがこちらに来なかった事に起因しているのだろつ。

それでも、言葉通り「良い」と思ったらしい。ぼんやりと、焦点の合わぬ目をしているコウに対し、クマ怪人はどこから取り出した肉厚のナイフを差し出し、コウも何の疑いも見せずにそれを受け取る。

「コウ!? 一体どうしたんだ!？」

あまりにも不自然な表情と行動に、ブラックの心配気な声が入る。

しかし、その問いに答えたのは問われたコウではなく、その後ろに立つクマ怪人であった。

「フフフ……言ったらう? 俺の蜜は神経に作用する、と」

「……まさか!」

「そう。使い方次第……運動野と意識を司る部位に作用させれば、相手を意のままに操る事が出来るのだよ。丁度、マリオネットを操るように。……そのガキを操れなかったのはこちらとしても誤算だが、1人でも人質としては充分だ」

ちらりとシンを見やりながら、クマ怪人は楽しげな声でそう言った。

同時に、クマ怪人によって操られたコウが、ナイフの刃先を自分に向ける。

「さて、動くなよ? 動けばこのガキは喉を突く。……自分でなあ」

「そんな……コウ!」

光の宿らない虚ろな目で、コウはシンとブラックの2人を見ている。親友の、今にも泣きそうな声にもまるで反応を見せない。

シンがコウに向かって一歩前進した瞬間、完全に操られてしまっているためなのか、彼は己に向けているナイフをゆっくりと自身の喉元に押し当てた。

切っ先が僅かに沈み、彼の皮膚を裂いて小さな赤い珠を作る。それが見る間に大きく膨らみ、やがて重力に逆らえなくなったのか、細い首を伝ってツウと流れ落ちていく。

その様子を見て、シンの足がぴたりと止まる。自分が動いたから、

コウが喉を突いたのだと理解したからだろう。コウに向かって伸ばしかけた腕が止まり、顔は悲しみと恐怖で歪んでいた。

「やめるんだ、コウ！」

「呼んでも無駄だ、仮面ライダーブラック。そのガキは俺の術中にある。貴様らの声など、そのガキには届かん」

コウの後ろに立つクマ怪人が、下卑た笑いを上げながら、勝ち誇ったような声で言い放つ。

シンの顔を見ては楽しそうにその目を細め、動けぬ彼らに向かってゆっくりと歩みを進めてくる。

それが、ブラックには悔しくてならない。ぎゅり、と拳を怒りに戦慄かせながら、彼は真紅の瞳をクマ怪人に向け、声を荒げた。

「くっ……卑怯だぞ、クマ怪人！」

「何とでも言うが良い。所詮は負け犬の遠吠え……いや、負けバツタの戯言だ。私は勝つ為なら手段を選ばんよ」

コウを人質に取られ、身動きの取れなくなったブラックを、ここぞとばかりに殴りつける。クマ怪人の鉤爪が、その外殻を、肌を、引き裂きブラックの体に傷と激痛を生む。

強化されたとは言え、相手も怪人。ブラックの体にダメージが蓄積され、ついにはがくりと膝を付く。それでも、相手の攻撃は弱まる事は無い。それどころか、ここぞとばかりに攻撃は……否、暴力は過激さを増していく。

抵抗できぬ相手を弄る事がクマ怪人のスタイルなのか、いつの間にかその顔には、サディスティックな笑みが浮かんでいた。

「ゴルゴムを壊滅に追い込んだ貴様を！ この俺が！ 追い詰め、倒す……これ程の楽しみがあるか！？」

「う……く、う」

「とは言え、俺の術も完璧ではないようだ。仮面ライダーブラックには幻から抜け出され、そのガキを操る事は出来ていない」

そう言うと、クマ怪人はまるでゴミを蹴り飛ばすかのようにブラックの顔を蹴り飛ばし、彼の体を近くの岩場に叩きつける。その顔

を、岩の陰で震えるシンに向けて。

どうやら、クマ怪人の興味は今、完全にシンに向いているらしい。理解し、ブラックは軋む体を何とか起こそうとする。しかし、強く打ちつけたせいか体が上手く動かない。ずるずると這うようにしながらシンへと向かうが、クマ怪人がシンの眼前に立つ方が、遥かに早かった。

「喜ぶが良い、ガキよ。貴様は生きたまま解剖して、その体を徹底的に調べてやる」

「ひっ!？」

「大人しくしろ。下手に動くと殺してしまうだろう」

怯えるシンの姿が面白いのか、クマ怪人は喉の奥でクックと笑いながら、彼の細い首に鉤爪を押し当てる。

鉤爪を通して伝わる、シンの震えや鼓動を感じ取りながら、クマ怪人は更に口の端を歪め……未だナイフを喉に押し当てているコウへと、その視線を送った。

それにつられるように、シンもコウへと視線を向ける。

首筋には先程微かに流した血の跡が乾ききらずに残っており、瞳はこちらを向いてはいるものの、何も映してはいない。

「もうそのガキはいらないな。意識を取り戻して、また襲われても困る」

全く困ってなどいないように聞こえる声で言い放ちながら、クマ怪人はニヤリと笑う。

「貴様はそのまま喉を突いて、死ね。そして、ゴルゴム再興の礎となれ」

「……………はい」

クマ怪人の命令に頷きを返し、コウは一旦自分の喉に当てていたナイフを遠ざける。

それが、勢いをつけるための行為である事は、誰が見ても明らかで……

少年は、迷う事無く行動を開始した。

虚ろな瞳のまま、彼は勢い良くナイフを振り下ろす。

「や……めろおっ！」

上手く動かぬ体で、必死になって手を伸ばすブラックの制止の聲が、洞窟に響く。

自分のその腕に、そして上手く動かぬ体と言うこの状況に。

過去の光景がフラッシュバックする。

親友に向かつて手を伸ばし、そして届かなかったあの光景に。

——あんな思いは、もう沢山だ——

動かぬ己の体を呪い、何の為にライダーになったのだと自分に言い聞かせ、必死にもがく。

だが……その一瞬後。肉が裂け、血が溢れる音がした。音源付近

……コウの足元にはパタパタと血が雫となって落ちていた。だが……誰かが倒れるような音は、響きはしなかった。

「な……あ……！？」

驚愕の声は誰のものだっただろうか。

その光景に、ブラックの……そしてクマ怪人の動きが止まった。

コウが向けた刃は、自身の喉を貫いてはいない。何故なら、その刃の部分を、シンが両手で包み込んでいるからだ。

滴る血は、シンの両の掌の物。きつく刃を握り締め、自分の手が斬られているのにも構わず、シンは精一杯の力を込めて、ナイフがそれより先に進むのを引き止めていた。シルエットだけなら、何かを祈っているかのように見えるポーズで。

「あのガキ、いつの間に！？」

驚愕と怒りの混じったクマ怪人の声が響く。

恐らくは、シンも反射的に取った行動だったのだろう。ぶるぶると震え、瞳一杯に涙をためながら、彼は精一杯声を張り上げてコウの名を呼ぶ。

「コウ、目を覚ましてよ、コウ！」

「離せ」

「嫌だ、この手を離したら、多分、きつと……うつん、絶対、僕は

後悔する！」

言葉と同時に、ナイフを握る手に、更に力が籠る。僅かに血飛沫が上がり、それがシンとコウの顔に飛ぶ。それ以上力をこめれば、手の筋を切つてしまい、最悪2度と動かなくなるかもしれない。

だが、そんな事は気にせず、シンは声を張り上げて言葉を続けた。
「だって、コウは、僕が一番大事な親友なんだからあー！」

その言葉が、コウの脳を揺さぶったのか。

コウの肩がピクリと跳ね上がり、僅かにではあったがナイフを持つ手の力が抜けた。更に、それまで虚ろだった瞳に、僅かながらの光が点る。

「シ……ン………」

「コウ！ お願いだから元に戻ってよ！ あんな奴に操られて……おまけに『死ね』なんて命令されて、悔しくないの！？ あいつは、コウのお父さんとお母さんを殺した奴なんでしょ！？」

真っ直ぐにコウの目を見やり、シンは半ば叫ぶように言葉を放つ。
一息に言葉を放ったせいなのか、少し苦しげに呼吸をしている。

だが、それでもまだ言葉が足りないと思ったのだろう。スウと勢い良く空気を吸い込むと、彼は今までで最大の声量を以って、親友に向かって怒鳴りつけた。

「厄介事は嫌いだって言ってるくせに、今はコウ自身が一番の厄介事になってるじゃないかあ！ 厄介事を……増やすなよお！！」

その叫びを聞いた瞬間。

コウの体がびくりと跳ね、喉を突こうとしていた手からは力が抜けた。

その様子に苛立ったのか、クマ怪人もまた、シンの声に負けぬ声量で命令を下す。

「ええい！ 何をしている！ もう良い！ そのガキを殺せ！！」

解剖は死んでもから出来る！」

「い……やだ」

「何！？」

まさか拒絶の言葉が返ってくるとは思っていなかったらしい。ぎよっとしたように目を見開く。

確かに、クマ怪人の持つ蜜の作用は、そう長くは続かない。とは言え、コウの意識は、先程まで完全に自分の支配化にあった。解けたとしても、まだ1時間程の猶予はあったはず。それなのに、不完全とは言え、コウは己を取り戻している。

原因が分らない事への苛立ちから、心底不愉快そうにその顔を醜く歪めるクマ怪人。

しかし、その凶悪な表情に臆する事無く、コウはきつく睨み返すと、蜜の支配と戦いながらも言葉を返した。

「シン……は、俺の、親友だ。……その、シンを……殺し、たら……俺、一生……後悔して、生きてく事に、なる」

——一生後悔して、生きていくんだ——

「黙れガキが！ どうせこの俺に操られるのだ。貴様の意識など関係ない」

「俺は……人形じゃ、無い。操られて、生きていくのは……自分の人格じゃ、無くなるのは……そんなの、死んでるのと、同じだ！」「死んでいる……？」

コウの言葉に、シャドームーンの影が重なる。そしてその影が、ゆっくりと信彦へと変わっていく。

クマ怪人の見せていた幻覚の名残なのか、それともブラックの……南光太郎の願いが見せている物なのか。その影は、幻覚の中と同じ、優しい笑顔で光太郎に声をかけた。

——光太郎、俺は死者だ。だけど、それはお前に殺されたからじゃない——

「信、彦……？」

——俺は、ゴルゴムによって人格を消されていた。その時点で、俺は……『秋月信彦』は死んだんだ——

幻影の信彦はそう言うと、悲しそうに笑う。

これは、許されたいと願う、自分のエゴが見せる幻だろうか。そ

んな事を思いながら、光太郎は幻影に向かって手を伸ばす。

あの時掴む事の出来なかった手を、改めて取る為に。

——思い出せ、光太郎。お前は何の為に……誰の為に、戦うんだ？

「俺、は……」

苦しげに呻きながら、光太郎が信彦の腕を掴んだ瞬間。

幻影は消え、漆黒に染まった自分の腕が見えた。

黒き腕は、永遠に消える事の無い罪の証。それを苦く思うと同時に……思う。罪に染まる腕は、自分の物だけで充分だと。あの子供達に、自分と同じ罪を……そして思いを、背負わせてはならないと。決意と共に、ブラックはその体を必死に起こす。

鉤爪の攻撃と、打ち付けられた事によるダメージが残っているが、それでもこの場で戦えるのはブラックのみ。年端も行かぬ少年達が決死の抵抗を見せているのに、戦う術を持つ自分が寝ていてどうする。

ブラックの動きを察知したのか、クマ怪人は慌ててそちらに目を向ける。

外殻の隙間からは、エネルギーが白い蒸気となって放出されており、闇の中で煌々と光る赤い瞳は、彼が見てきた血の色。闇よりもなお暗い漆黒の体は、彼が背負う罪の色。

「あれだけ食らって、まだ立ち上がるか、仮面ライダーブラック！」

「人々の命が脅かされる限り……俺は何度でも立ち上がる！ それ
が俺の……戦う意味だ！」

忌々しげに声を荒げるクマ怪人に向かって宣言すると、ブラックはまずコウの手からナイフをそっと受け取り、シンの両手にはどこから取り出した2枚のハンカチで簡単な止血をする。

「今はこんな簡単な事しか出来なくて、ごめん。2人はそこに隠れているんだ。いいね？」

ブラックの声に、2人の子供はこくりと頷くと、今度こそ足手纏いにならぬよう、すっぽりと近くの岩陰にその姿を隠す。

それを見届けると、ブラックは瞬時に体を翻し、高々と爪を振り上げていたクマ怪人の右腕を受け止め、首筋めがけて強烈なチョップを繰り出す。

氣道が一瞬塞がったのか、クマ怪人は低く呻くと、咳込みながらもブラックとの距離を取る。苛立っている口調とは裏腹に、随分と冷静な判断を下している様に、ブラックには思えた。

「あと少し……あと少しで、ゴルゴム再興が可能だと言うのに……！」

「ゴルゴムの再興だと？ 一体何を企んでいる！？」

「人間の命をエネルギーに変換し、『あのお方』を復活させる！あと少し……あと少しなのだよ！」

鬼気迫る迫力、と言うのはこう言った物を指すのだろうか。岩陰に隠れていたコウとシンの2人ですら、その声に、そして雰囲気にはびくつき、小さな体を更に小さく丸める。

その迫力を間近で感じながら、ブラックはクマ怪人の言葉の意味を考えていた。

ゴルゴムの再興、そして「あのお方」。恐らく、自分が倒したゴルゴムの首領……創世王の復活を目論んでいるのだらうと推測できた。

そしてそのために、人の命を犠牲にしている事も。

「そんな事はさせない！」

「何故だ！？ 人類はゴルゴムの……創世王の支配下にある事で、初めて真の幸福を得る！」

「何人も人間を犠牲にした上の支配が、本当に幸福につながると思っているのか！？」

「思っているとも！ 弱く愚かな者は駆逐され、真に強く賢い者のみが世界を制す。それこそが理想の世界のはず！ 少なくとも、私は……そしてゴルゴムに加担する者は皆、そう思っている！」

拳を繰り出し、それをかわして蹴りを放ち、またそれをかわして拳を繰り出す。

そんな攻撃を繰り返しながら、ブラックとクマ怪人は言葉を交わす。

2人は一旦距離を取り、上がりかけた息を整えると、どちらからとも無く再び距離を詰め、またしても拳と蹴りの応酬が始まる。

ブラックの右拳がクマ怪人の左頬を捕えたかと思えば、クマ怪人の右足はブラックの左足を払う。崩れた体勢をごろりと転がる事で立て直し、ブラックはぐつと拳に力をこめた。

まるで、次の攻撃で終わりにすると言う決意でも込められたかのように。その決意はクマ怪人にも伝わったのだろう。相手も鉤爪の付いた右手を突き出し、神経に作用すると言う蜜をその鉤爪に塗りつける。物理的にも精神的にも、相手を確実に仕留める為に。

「ゴルゴムの支配した世界に、何の感情も無い。あるのはただの恐怖だけだ！」

「恐怖による支配で何が悪い！？ 情など、己を弱くするだけだろう！」

「……だが、お前の技は、その『情』によって破られたはずだ！」
ブラックの言葉に、クマ怪人のこめかみがピクリと引き攣る。

感情が人間を弱くする。だからこそ、クマ怪人はブラックに……
南光太郎に、情に訴えるような幻覚を見せた。

彼が気に病んで止まない、「親友殺し」と言う罪の意識を増幅させ、己に絶望させる。

「絶望とは死に至る病である」と言うのは、とある哲学者の言であり、クマ怪人はそれを正しいと思っている。どれ程強靱な肉体を持っていようと、「絶望」を抱いた者は脆い。その事を知っているからだ。

情があるから、絶望する。情が無ければ、全てを切り捨てる事が出来る。情の無い指導者を崇拜するクマ怪人にとって、「情によって己の技を破られた」と言う事は、受け止め難い……否、受け止める訳には行かない「事実」。

しかし、心の片隅で、クマ怪人は理解していた。コウにかけた呪

縛が解けたのは、紛う事無く、シンとの「友情」なる物の強さがあつたからだ。

「……認めん。認めん、認めん、認めん！ 情などと言う、不確かで不安定な物が『力』だなどと、決して認めん！！」

カッと目を見開き、クマ怪人は勢いに任せて右腕を伸ばす。

だが、ブラックはその拳をひらりとかわすと、右の拳にキングストーンエネルギーを集中させ……

「ライダーパンチ！」

「ぐあ！？」

黒かった手がエネルギーによって赤く染まり、チカチカと眩い光を放ちながらクマ怪人の鉤爪を破壊する。

キン、と破壊されたそれが、金属音を立てて落ちた。同時に、クマ怪人の右腕にも多大なダメージを与えていたらしい。相手は呻くと、自分の右腕を抑えてよろよろと数歩、後退る。

だが、ブラックの攻撃は終わらない。そのまま彼は大きく跳ぶと、今度は足先にエネルギーを集中させた。空気との摩擦で彼の足が灼熱色に染まり、再び白い光が明滅する。

「ライダーキイイック！」

ブラックの声と足が、同時にクマ怪人の体を捕らえ、その体に終焉をもたらすエネルギーが打ち込まれる。

その反動で、彼は大きくよろめき、風に舞う木の葉のようにひらひらとその場で回転しながら崩れ落ちる。

「お……おのれえ……おのれえええええっ！」

悔しげに声を吐き出すクマ怪人。その体からは、バチバチと火花が散り、薄暗い洞窟の中でそこだけが妙に明るくなった。

それは、ゴルゴム怪人の最期を示す事を、ブラックは経験上知っている。

まるで、己の体に残された機密を保持するかのように、四散し、この世から消え去るのだ。

……生きていた証を、一切残さない死。それは果たして、幸せな

のだろうか。

答えの出ない問いを心の中でのみ浮かべながら、ブラックはクマ怪人に背を向け……

「我が命は……偉大なる秘密結社ゴルゴムに！……そして次期創世王に……栄光あれええええ！！」

膝をつき、天に向かって吠えながら。

クマ怪人は最期にそう言い残すとその場で爆発、四散した。

終わった事を確認すると、ブラックはふうと深い溜息を1つ吐き出し、その姿を南光太郎に戻す。そしてコウとシンの方に向き直ると、にっこりと笑い……

「ありがとう。2人のお陰で勝てたよ」

感謝の気持ちを込めて、そう言った瞬間。ぐらりと、洞窟が揺れた。

「え？ ええ！？」

「地震！？」

「まさか……さっきのクマ怪人の爆発で！？」

元々、それ程強固な洞窟ではなかったのだろう。それが、クマ怪人の最期の爆発をきっかけに、崩れ始めたのだろう。

ガラガラと頭上から砂や石が降り注ぎ、今にも崩壊しそうな雰囲気醸し出している。

慌てて逃げようとする2人の子供だが、コウは未だクマ怪人の「蜜」の効果が生きているのか、がくりとその場に膝をつき、そんな彼を支えようとしたシンも、ナイフで切った手が今更ながらに傷むのか、うう、と小さく呻く。

それを見やると、光太郎は2人の体を軽々と抱え上げ……

「2人とも、僕に捕まってるんだ！ 良いね？」

「う……うん！」

「ごめん、頼む」

答えを聞くと同時に、光太郎は自分のできる精一杯の速度で駆け出していた……

助かった事で安心しきつたらしい。ぐっすりと眠っている2人の子供を抱えながら、光太郎は彼らの家に向かって歩を進めていた。

夜の闇を退けるかのように、太陽はゆっくりとその顔を出し、月はこれから眠りにつくうとしている。それを見て、今更のように今夜が満月だったと気付く。

四季折々の季節を持つこの国において、美しい物の代表とされる秋の月。地平線へと堕ちていくそれを見やりながら、光太郎の瞳から一筋の涙が零れ落ちる。

——信彦。俺はこれからも、お前を殺した罪を背負う——

あの時見た幻の信彦が許したとしても、やはり止めを刺したのは自分だ。その事実是不変。そして、その事で苦しむ事も。

苦しんで、苦しんで……だけど、その苦しみと戦う。苦しみから逃げる事は、もう1度「秋月信彦」と言う人格を殺す事になると知ったから。

「幸せは、きっとそこにあるよ……」

「ん？」

「ずっと……側にいる……」

どうやら、子供達の寝言らしい。何だか諭されるようなその言葉に、光太郎はふ、と目を緩め……そして、起こさぬように抱きかえ直しながら、ゆっくりと前へと進んでいった。

2度と負けないと、もう1度己の中に誓いを立てて……

「……一応、銀髑髏も『仮面ライダー』って事になるのかねえ？」
冬の寒空の下。ある街の寺で、境内を掃いていた1人の僧侶が、懐から1枚の白いハンカチを取り出して、思い出したようにポツリと漏らす。

僧侶はひよろりと背が高く、どこか気だるげな印象を抱かせる。しかし、そんな態度とは反対に、彼の目は獲物を狙う猛禽のように鋭い。

……彼の法名は、光雲。本名は、信。「信じる」と書いて「シン」と読む。法名に自分の名を入れず、過去の彼とは別人のように振舞うのも、全ては「消えてしまった」親友への憧れが強かった為だろう。

ある雨の日。親友は忽然とその姿を消した。

近所の崖の上に、彼の靴だけが残っていた事から、大人達は転落してしまったのだと判断した。

その崖は、かつて自分が落ちかけた事のある場所でもあった。

幼い頃に経験した出来事が、今の彼を作り上げた。

親友を失う事の恐怖と絶望。

無力ゆえに、ままならぬ出来事へのもどかしさ。

人生と言う物の冷酷さ。

異形に勝つには己もまた異形にならねばならぬ事。

……それ故に、彼は神鳥の力を手に入れた。その選択が間違っているとは、今でも思っていない。たまに暴走しそうになるが、そこは必死に押さえ込んでいる。

——自分と言う人格を無くしてしまうのは、死んでいるのと同じ——
かつて親友がそう言って、自分を保っていたから。だから彼も、そう自分に言い聞かせて自我を保っている。「厄介事を増やすな」と言う口癖も、いつの間にか移ってしまった。結局の所、消えた親友に依存しているのだと思う。親友になりきってしまう事もまた、「人格を失う」と言う事だと気付けぬ程に。

かつて出会った「ハンカチの持ち主」が、しきりに同じ名を呼んで苦しんでいた理由が、今なら良く分る。彼もまた、おそらく、最愛の親友を失くしたのだろう。

「親友を引き離しちゃいけない。それが、運命ってモノだとしてもだ」

——ねえ、僕、間違っていないよね？——

心の中でのみ親友に問いかけ……やがて光雲はいつも通りの、どこか人を小ばかにしたような表情を浮かべた。

「さてと。それじゃあお仕置きの準備をしておかないとな」

そう言つと、彼はふと空を見上げる。浮かぶ太陽と、それに負けまいともがく新月の姿を見つめ……

「ああ、今夜もいい闇夜になりそうだ。人が消える……漆黒の夜に」
その顔に浮かぶのは楽しげな笑み。そしてその目に映るのは……

幻影の、親友……

こんばんは。

最近両腕が上がらなくなってきた辰巳です。

ううむ、年かしら……？

と言う訳で、「Episode BLACK:戦場のBrave Luck」が終了了。

BLACKの最終回で、思いつきり悲惨な終わりを経験していながら、RX冒頭ではものっそい明るくなっていた光太郎さん。

その間に何があったのか？ 立ち直るきっかけはなんだったのか。そんな事を考えた結果、どこかで見たような話になってしまいました。

シャドームーンは、BLACKにおける最期の時、あくまで「秋月信彦」としてではなく、「シャドームーン」として亡くなったように思えました。

……と言う事は、「秋月信彦」の死は、一体どこだったのか。それが、今回言ったように、「秋月信彦の人格が消えた時」だと判断いたしました。

そして、幻覚とは言え、それを本人に言わせる……都合のいい幻かも知れない。でも、言ってもらえて少し楽になれるかもしれない。そんな感じで、ちょっとだけ楽にさせました。

それでは、ちよいと怪人の説明をば。

クマ怪人

ゴルゴム怪人残党。実はシャドームーンを密かに救出、人間の命をエネルギーに変えて、擬似的な「命のエキス」を作り出して彼を完全復活させようと目論んでいた。

武器は右手の鉤爪で物理的に痛めつけ、左手の蜂蜜で相手の神経

を侵食、幻覚を見せたり相手の意思を奪って思い通りに働かせる事ができる。

パワーファイターのように見せかけて、実は科学者出身の為、結構狡賢い。しかしある一定の人物（ガイアメモリの過剰適合者など）に対しては蜜の効果は薄い。洞窟が暑かったのは、冬眠しない為と言っ裏設定もある（ちよつと待て）

……さて。

ラストにて明かされましたアンフェア叙述トリック（トリックにもなつてねえよ）。

如何でしたでしょうか？

ちなみにこの後、エピソード銀のラストシーンにつながります。つまり、この後スタチュードーパントはスカルに倒され、ガルーダドーパントに殺される訳でございます。

消えた「親友」の事、そしてもう一つ……「ある事」は、次のエピソード白で登場……の、予定です。

それでは、次回、「Episode WHITE：雨のち晴れ、時々薔薇」にてお会い致しましょう。

Episode WHITE：雨のち晴れ、時々薔薇（前編）

雨の中を、少年が1人走る。夜も更け、悪天候も手伝って人気も明かりも少ない。その上道幅もせまく、片側一車線有るか無いかが。少年の耳には、道の下に広がる海からの潮騒の音が、煩く聞こえていた。

買い物に出た頃はまだ太陽も出ていた。それなのに、いつの間にか雨雲に覆われ、光の代わりに激しい雨を天は地上に注ぎ始めた。降り始めの頃は通り雨だろうと高を括っていた少年だったが、いつまで経っても止む気配が無く、仕方無しに雨の中を、傘も差さずに走っていた。

買ったばかりの「商品」を、大事そうに抱えて。

——ああ、もう。雨に当たるなんて、なんて厄介なんだろう——自然現象に文句を言っても仕方無いのだが、ついそんな事を思ってしまう。今日はとても大事な日だと言うのに、遅れてしまうのは忍びない。

逸る気持ちを抑えず、少年はひたすらに走る。そして……「それは起きた。

……その日、1人の少年が姿を消したのだ。片一方の靴だけを残して。

何が起きたのか、およその推測しか出来ぬまま、大人達は少年を崖から海へ転落したものと判断。「行方不明者」として、扱われた。この日、何があったのか……知っているのは、その消えた少年だけである……

——昨日まではあんなに天気が良かったのに——

空から零れ落ちる涙雨を眺めながら、本編の主人公……光夏海は

あからさまに肩を落とした。

雨が降ると、客足が落ちる。それは、客商売なら恐らく殆どの店がそうだろう。何も夏海の家……写真館だけに限った事ではない。これと言って予定があつた訳では無いが、雨はどうしても気が滅入ってしまう。

——空が暗いから、私の気分も暗くなるんでしょうか——

薄灰色の雲を窓越しに見つめながら、彼女はふうと溜息を吐いた。
「溜息をつくと、幸せが逃げちゃうわよ、夏海ちゃん」

「キバーラ……」

夏海の周囲を飛ぶ、小さな白いコウモリに似た生き物……キバーラが、夏海を元氣付けるかのように言う。

普段は人を喰つたような喋り方をするくせに、こう言う時だけは何故か夏海に優しいのは何故なのか。

彼女の事だ、特に深い意味は無いのだから。

そんな事を思ふ夏海の後ろでは、どこかつまらなそうな表情の居候その1こと門矢士と、この雨すらも楽しんでる節のある居候その2こと小野寺ユウスケ、そして何故か最近この写真館に居つくようになった居候その3こと海東大樹が、3人でダウトに興じていた。
「安心しろ、ナツミカン。お前はこれ以上不幸になりようが無い。」

……10」

「つまり、ナツメロンは今が底辺と言う事かい、士？ ……11」

「2人とも酷い言い草だなあ。でも、悩んでるなら話聞くよ？ ……」

…12」

『ダウト』

「げ、ばれた」

どうやらユウスケの出したカードは、ダウトだったらしい。士と大樹に同時に言われ、彼はそそくさとカードの山を回収した。

彼らがこの世界に来てから、今日で1週間になる。その間、色々調べては見たものの……何も分らない、と言うのがわかった事だった。

今までは存在していた「土のコスプレ」…… もとい、彼の役割とやらは振られず、だからと言って夏海が住んでいた元の世界でもない。大樹もめばしいお宝とやらが見つけられていないのか、不気味な程大人しくこの写真館で居候をしている。

いつもなら土を目の仇にしている鳴滝でさえ、この世界に来てからは顔を出していない。

怪人に関する情報も無く、何故自分達がここに来たのか、正直分らないくらい平和な世界だ。

——平和なのは良い事なのに…… 何だか、嫌な感じがするのは、どうしてでしょう？——

軽く顔を顰め、再び夏海の口から溜息が漏れる。そんな彼女の顔を見ていたキバーラが、その小さな翼で夏海の眉間に寄った皺を叩き……

「夏海ちゃんは可愛いんだから、そんな顔しちゃダメよ。ね？」

「キバーラ…… ありがとうございます」

可愛いと言われて、嬉しく感じない女性は少ない。夏海だって、お世辞でも可愛いと言われれば嬉しい。

彼女の気遣いに、それまで寄っていた眉間の皺を伸ばすと、今度はその顔ににこやかな笑顔を向け、軽く頭を下げた。

ありがとう、と言う言葉では足りないくらいの感謝を込めて。

その直後、気の良さそうな声がこのスタジオに響いた。

「はい皆。コーヒー入ったよ」

声の主はこの写真館の主でもある、光栄次郎。その手には少し大きめの盆と、そこに乗った5つのカップが納まっている。

カップからはゆらゆらと湯気が立ち上り、広いホールいっぱいコーヒーの香ばしい香りが漂った。

お気楽な印象を持たせる祖父だが、意外と何でもこなせてしまう。写真を撮る事に始まり、コーヒーを淹れる、お菓子を作るなど。恐らく「夏海を喜ばせる為」に身につけた技術なのだろう。好々爺然とした笑顔も、夏海を不安にさせないための物だろうと、最近にな

ってようやく夏海は理解できたように思う。

まだまだ、理解しきれない部分も多いのも確かだが。

「それにしても、おかしいねえ。天気予報じゃ、今日も冬晴れだつて言ってたのに」

「天気予報ほど当てにならない物は無いだろ……6だ」

「あ、土。それダウトだろ」

「……チッ」

眦を下げて不審そうに呟く栄次郎に対し、土は渡されたコーヒーを啜りながら言葉を返す。無論、カードゲーム片手に持ったままで随分と暢気な物だと思ふ反面、たまにはこう言う世界があっても良いかと、夏海は思う。今まで土は、「悪魔」、「破壊者」などと呼ばれ、虐げられて来たのだ。ひよっとするとこの世界は、自分達に与えられた「休息の世界」なのかもしれない。

そんな風に思いつつも、やはり窓の外で滴り落ちる雨を眺めていると……ふと、視界の端に、黒っぽい影が見えた気がした。

——え？——

自分の吐息で白く濁る窓を拭きつつ、夏海はその影に向かって目を凝らす。

そこにいたのは、白っぽい服を着た1人の青年。寒さからか、ガタガタと震えながら軒下で蹲り、両腕で自分の体を摩っていた。それを見つけると、夏海は思わず軽く首を捻り……それでも、放っておけないと思ったのか、扉を開けてその青年の元に駆け寄った。青年の様子が、土と初めて出会った時と似ていたせいもあるのかも知れない。

窓越しに見た時には分らなかったが、いつから濡れているのか、服はべったりと青年の素肌に張り付いて、華奢とも言える体の線を見せ、顔色は長時間雨に打たれていた為か蒼白い。

体をぎゅっと締め、膝を抱えて蹲るその様子は、まるで何かに怯えているようにも見える。

「あの……うちに、何かご用ですか？」

「あ……？」

もう少し他の聞き方もあっただろうにと、夏海は少し後悔するが、青年の方はあまり気にしていないらしい。問いかけに、彼はそっと顔をあげた。

年は士よりやや上くらいだろうか。鋭い目つきをしているが、こちらを見上げる瞳は熱でもあるのか、妙に潤んでいる。

「ああ、ごめん。俺……雨が、怖くて。止むまで、どこかに隠れていたくて。それで……」

「それで、ここで蹲っていたんですか」

「……ん」

こくりと頷くと、青年は出来る限り自分の視界に雨と言う天候が映らぬ様、再びその顔を自分の膝に埋め、丸くなってしまう。

そんな彼に、樋から漏れた雨垂れがひたひたと落ち、追い討ちをかけるようにその体を濡らしていく。

雫が彼の体に落ちる度に、青年はびくりとその体を震わせ、嫌々と首を横に振る。その姿を見ていられなくなったのか、夏海はそつとその青年に手を差し伸べる。

基本的に、困っている人を見捨てておけない性格らしい。雨宿りくらいはさせてあげても良いと思った事も確かだし、このまま放っておいたら確実に風邪をひく。いや、既にひいているかも知れない。「それじゃあ……中で止むのを待ちましょう」

「良いの？」

「ここだと、風邪を引いてしまいますから」

差し出された夏海の手を、おずおずと取りながら、青年は濡れた体を引きずるようにしながら、写真館の中へと入って行った。

冷え切った体じゃ風邪をひくといって、栄次郎が風呂を沸かし、青年を放り込んでいた頃。

ダウトで惨敗を喫したらしいユウスケが、いそいそと飲み終わったコーヒークップを洗いながら、夏海に向かって声をかけた。

「大丈夫なの、夏海ちゃん？ 見ず知らずの人を上げちゃって。お客さんって訳でもないんだろ？」

「大丈夫かはわかりませんが……何となく放っておけなかったって言うか……」

答えに詰まり、口ごもる夏海。

何となくではあるが、彼女は青年に奇妙な印象を抱いていた。

外見と中身が一致しないと言うか、妙に仕草が子供っぽいと言うか。姿は大人なのに、中身は子供、と言う表現が一番しっくりと来るだろうか。

「ひよつとして夏海ちゃん……一目惚れ？」

「……はあ！？ 何でそんな話になるんですか！？」

うーん、と唸っていた夏海に、洗い物が無事終了したらしいユウスケが突拍子も無い事を言い出す。

その言葉に、思わず夏海は頓狂な声をあげ、信じられないと言わんばかりに目をカッと見開き、ユウスケの顔を睨みつけた。

そんな訳が無い。単純に夏海は人助けの為に手を差し伸べただけだ。

そう言葉を紡ごうとして、しかしそれは他の面々の声に遮られた。「やだ、夏海ちゃんってば恋する乙女！？ って事は、夢にまで見たコイバナと言う名のガールズトークが展開できるって事！？ そう言う展開を待ってたのよ」

「へえ？ 気障な言い方をすると、ナツメロンの心を盗んだって事か。正直それ程のお宝だとは思えないが、その手腕には興味がある」「なあ士、うかうかしていると夏海ちゃんを盗られるんじゃないか？」「……何でお前の中で俺とナツミカンが付き合ってる設定になってるんだ、ユウスケ？」

楽しいなキバーラ、妙に元気な海東、そしてやたらと土をたきつけるユウスケの声に混じって、土の呆れたような声が夏海の耳に届

く。

はあ、と深い溜息を吐き出し、ちらりとこちらに向かって馬鹿にしたような視線を送り……

「大体、ナツミカンみたいな凶悪な奴に恋愛の『れ』の字もある訳が無いだろう。奴の中に存在するのは、色気より食い気だ。その証拠に見ろ、あの救いようの無い二の腕の肉の付き方を」

「確かに、ナツメロンは色気に乏しいね。二の腕だけでなく、腿も少々太めだし」

「2人とも、いくら本当の事だからって不味いつて!!」

………

「……3人とも、そこに一列に並んで下さい？」

につこり……を通り越してにーつこりと。

驚くくらい綺麗な笑顔を浮かべ、彼女はそんな事を言う。

その笑顔に嫌なものを感じたのか、3人はジリと一步後ろに下がる。しかしそれを軽やかに無視し、夏海は驚くべきスピードでその距離を縮めると、即座にその親指を立て……

「光家秘伝、奥義・大笑いのツボ!!」

ドスドスドスっ!

3人の首筋へ、見事にその親指が入る。その直後、土、海東、ユウスケの順にのけぞり、床を転げまわりながら大笑いを始めた。

……光家秘伝、笑いのツボ。通常はその場で腹を抱えて笑うだけだが、今回はそれを更に強化したものになる。

最低でも5分間は立っていられないくらいの「笑い」を誘発させ、下手をするとう息をも促すと言う禁断の技だ。ちなみに通常の「笑いのツボ」ならば、多少の弁解も可能だが、この技はそれすらも許さない。

口から漏れる声は笑いのみと言う、ある意味最大の拷問である。

「しばらく笑って自分のセクハラ発言を反省して下さい」

フン、と鼻を鳴らす夏海の周囲を、キバーラはぴよいぴよいと飛び回り……

「容赦ないわね、夏海ちゃん。まあ、気持ちは分るけど」

「当たり前です。それに、言われる程贅肉は付いてません……多分」ムスリとした表情で……しかしどこか自信なさげにそんな事を言いながら、夏海は風呂場の方に視線を向ける。

雨が怖いと言っていた青年の事を、なんとなく気にかけてながら……

風呂から青年が上がってきたのと、栄次郎がサイズの合いそうな服……はつきり言ってしまうは士の私服……を持って脱衣所に入ってきたのは、ほぼ同時だった。

「おや、もう上がったのかい？ もっとゆっくり入って温まった方がよいよ？」

「……そこまで厄介になるのは、悪いから。それに、充分温まったちゃんと俺、湯船の中で100まで数えたしさ」

言いながら、青年はにつこりと笑う。

子供のように無邪気な笑みを見て、栄次郎も思わずくしゃりと笑いかけ、うんうんと頷いてタオルを渡す。

そして……気付いてしまった。青年の肩甲骨近辺に彫られた刺青に。それを見て、栄次郎はぎょっと目を見開く。

その意味を、栄次郎が……そして、もう1人の彼とも言える存在が、知っていたから。

そして瞬時に栄次郎は相手の肩を掴み、彼の瞳を見つめながら真剣な表情で言い聞かせた。

「良いかい？ これは……このマークは、決して他の人に見られちゃいけないよ、いいね？」

「……ん。分かった」

栄次郎の真剣さに気圧されたのか、彼は素直に頷く。ひよつとすると、彼もその意味を知っていたのかも知れない。そう思うと、栄次郎は悲しそうに目を伏せた。

——まさか、こんな所に——

ようやく、休息を取れると思ったのに。運命と言うものは、どうやらそんな暇をも与えてくれないものらしい。

恐らく、戦いになる事は避けられないだろう。それが、否が応でも分かってしまう。

しかし願う事なら、誰も……目の前に立つ彼も含めて、傷付かない結末を。

……栄次郎は、心の底からそう願う。

そんな事は、決してありえない事だと知っていながら……

Episode WHITE：雨のち晴れ、時々薔薇（前編）（後書き）

キバーラ編、始動です。

出来ればギャグテイストで行きたいこの話、いかがお過ごしでしょうか。

……と言いますのも、この前の「Episode SILVER」、
「Episode BLACK」があまりにも重すぎた事があり、
ここで笑いの要素が無いと重すぎると思ったからです。
その結果が、セクハラ発言だったりしてしまった訳ですが。

正体モロバレなんだから、今更「青年」と言う表記も無いや！
と思わなくも無いのですが。

……頑張れ夏海ちゃん。私の苦手な恋愛テイストを醸しだせ！
……って、原典中に土と夏海ちゃんの恋愛感情めいたものってあった
っけ？ とか思わなくも無かったり。
どうしましょう。とりあえず今回の天気は「雨」。これから1人ず
つ減っていきますよー。何しろそう言うあらすじですしね！！

それでは、また次回！。

……なんか白はグダグダやなあ……

Episode WHITE：雨のち晴れ、時々薔薇（中編）

未だ降り止まぬ雨を窓から眺めつつ、夏海はぼんやりと考え事をしていた。

……笑い疲れて床でぐったりとしている、男共を尻目に。

——あの人は、どうして「雨が怖い」なんて言っていたんでしょう？ それに、ちょっとちぐはぐな感じとか、土君みたいなちよつと人を寄せ付けない感じの目つきとか……勿論、土君の方が何倍も悪人っぽいですけど。この世界の事も、あの人なら何か知ってるかもしれないし、後で聞いてみましょう。……と言つか、土君達も言いすぎです。そりゃあ確かに最近ちよつと食べすぎで、二の腕がちよつときつくなつて来たかな〜とは思いますが、「救いようの無い」所までは行っていないません！ まだ服のサイズは7号です！——

女子特有の脈絡も無くぶつ飛ぶ思考回路で考えながら、夏海は不機嫌そうに土の方を見やる。

そこには、ぜえぜえと呼吸を整え、こちらを恨めしげに睨む彼がいる。まだ少し先の夏海の「攻撃」が効いているのか、時折彼らしからぬ笑い声が聞こえ、肩もヒクヒクと戦慄していた。

「な……ナツミカン、ユウスケや海東はともかく、俺まで殺す気か！？ 一瞬赤っぽいや色の川が見えたぞ！ ははっ」

「あっはっは……俺達は良いのか！？ って言うか土、その川は見えちゃまずいだろ！？」

「ははははっ。そ、そこに外道衆はいたかい、土？」

「いたかもな。……危つく連中のお仲間になるところだった」

笑い混じりの戯言たわごととも取れる彼らの抗議の声をBGMにしつつ、夏海は再び視線を窓の外に送った。彼らに構っていたら、時間がいくらあっても足りないと思ったのかは、定かでは無いが。

先程に比べ、雨足は弱くなっている。雲の絶え間からは、太陽がその存在を主張するように己の光を降らせ、うっすらと輝く七色の

橋を彼女に見せている。

「虹……」

「綺麗だよな」

「ええ」

「この街では、虹は『女神の贈り物』って呼び方もあるんだ。風が雲を切って、その隙間から陽が射すから」

「へえ、なんだかロマンチックですねえ。………って、ひやあつ!？」

頭上から降ってきた声に、夏海は思わず頓狂な悲鳴をあげて声の主を振り返る。

そこには、土の服を借りたらしい先程の青年が、夏海に寄り添うようにしながら、無邪気な笑顔を浮かべて空に浮かぶ虹を見ていた。「……け、気配を殺して立たないで下さい!!」

「ん……ごめんお姉さん。俺、そんなつもりは無かったんだけど………久し振りに虹を見たから、つい柄にも無くはしゃいだ」

夏海に言われ、青年はしゅんと子犬のようにしよげ返る。その様子が、やはり気が強そうな外見とそぐわないせいか、逆に胡散臭さを感じてしまう。

それに……青年はどう見ても、自分と同年か少し上くらい。それ故に、「お姉さん」と言う呼ばれ方をするのは、何だか違和感を覚えるのだ。軽い感じのナンパ男の中には、女性に向かって年齢問わず「お姉さん」または「お嬢さん」と呼んでくる輩もいるが………軽く眉が寄ってしまふのを感じながら、夏海は青年の顔をじいつと見やる。

その一方で、青年の方は疲労困憊の様子の子の男達を見つめ、不思議そうに首を傾げた。

「ところで……何でお兄さん達はそんな疲れてんだ？」

「ふ……はははっ。そこにいる、ナツメロンにやられたのさ。君も気をつけたまえ」

「なつめろん？　って、お姉さんの事か？」

きょとん、と言う表現が一番しっくり来るような表情で、青年は夏海の目を覗き込むようにしながら問いかけてくる。

その仕草に、この日何度目かの違和感を覚えながらも、彼女は深い溜息を1つ吐き出し……

「私は夏海です。光夏海。土君は私をナツミカンって呼びますし、海東さんはナツメロンなんて呼んでくれますけど。……ところで、あなたは？」

ミニテーブルの上にあったメモ帳とボールペンで自分の名を書いて青年に見せる。

その字面を見た瞬間、青年は一瞬だけ嬉しそうにその目元を緩め……しかしすぐに、どこか皮肉っぽい印象を与える笑顔を浮かべ、その文字列の最初の一文字……「光」の字を指差しながら、言葉を放った。

「へえ、偶然。俺も、この字」

「この字って……『光』？」

「俺は、苗字じゃなくて、名前で………コウ」

「光さん、ですか？」

「コウで良い。さん付けとか、あまり好きじゃないんだ。……子供扱いされてるみたいで」

夏海としては、子供扱いをしているつもりは無いのだが、どうやら青年……コウにはそうは思えないらしい。彼の感性はいまひとつ分らないが、とりあえず本人が許可を出しているので、夏海も彼をコウと呼び捨てにする事にした。

……初対面の人間に対して呼び捨てにするのは、多少の……いや、かなりの抵抗はあるが。

そんな夏海のかすかな抵抗に気付いていないのか、コウは窓の外をじっと見つめ……

「ああ……やっと、雨止んだみたいだ。厄介事が1つ減った」
と、心底安堵したような呟きを漏らす。

そして、やおら彼の近くで膝について呼吸を整えているユウスケ

の腕をぐいと引っ張って立ち上がらせると、にっこりと笑いかけた。その唐突な行動に、ユウスケは……そしてそれを見ていた他の面々も、鳩が豆鉄砲を食ったような表情を浮かべ、不思議そうに彼を見つめる。

「な、何？」

「雨止んだし、一緒に散歩に付き合つてよ。……俺、どうしても行きたい……いや、行かなきゃいけない所があるんだ」

にこやかな笑みに似合わぬ、真剣な声に……彼らは何かを感じ取り、思わず彼の望み通り、「散歩」に付き合う事にしたのである。

「……これって、こんなに小さかったっけ……？」

「え？」

「散歩」で最初に到着したのは、ある種お決まりとも言える「公園」の前。

そのこの入り口付近で、コウが何かを見つめながら寂しそうに呟きを落とした。その呟きに気付き、夏海は彼の視線を追う。

その先にあつたのは、慈愛に満ちた表情を浮かべる女神の青銅像。教会などで見かける聖母の像に雰囲気似ている。風にたなびくスカートと長い髪が細やかに再現されており、まるで生きているかのような躍動感がある。

大きさは台座を含めてもコウの身長とほぼ同じくらいだろうか。

実際に見ると小さく感じるが、その小ささをカバーするような存在感が、その像にはあつた。

「へえ！ 見事だなあ」

「確かに、これは随分と見事なお宝だ」

「まあ、この街の象徴って言われてるくらいだから。この街の住人なら、この像の事は誰でも知ってる」

「確かに、存在感はあるな」

感心したようなユウスケと海東に返すコウの言葉に同意したのか、

珍しく土も魅入られたようにその女神像に視線を向け……やがて、思い出したように夏海の方を振り返ると、何故か深い溜息を1つ吐き出した。

「……何ですか土君、その呆れ返った様な視線は？」

「別に。ただ、何故俺と一緒に旅をしているのが、センスの欠片もない、お子様体型のナツミカンなのかと、疑問に思っただけだ」

「……まだ引つ張りますか、そのネタを」

土の失礼極まりない発言に、夏海はぐつと親指を立てて彼を睨みつける。しかし、土は軽くその視線を無視すると、今度はじつとコウの方へ目を向けていた。

その視線に気付いていないのか、見られている方はじつと女神を見つめたまま、寂しそうな表情で何事かを呟いた。その声は小さすぎて、夏海の耳には届かなかったが……土の耳には届いていたのだろうか、彼は一瞬だけ不審そうな表情を浮かべ、しかしすぐにいつもの、どこか不服そうな印象を抱かせる表情に戻った。

「……おい」

「ん？ 何、お兄さん？」

「写真、撮ってやる。その女神と一緒にな」

ひょいと首のカメラを掲げて土は言うつと、困惑するコウを半ば強引に女神の側に立たせ、シャッターを切った。

「……ありがとう」

「……今回ばかりは、この世界が俺に撮られたがっていない事を祈っておけ」

「へ？」

言われた意味が分らないのか、コウはきょとんと目を開いて首を傾げた。

土の写真は、いつもピントがぼやけ、何故かブレている事が多い。それを本人は、「世界が俺に撮られたがっていないからだ」と言い張っている。単純に彼の腕が悪いのか、本当に世界が彼に撮られる事を忌避しているのか、はたまたその両方なのかは分らないが。

しかし、「撮られたがっていない事を祈れ」とはどう言う意味なのだろうか。

彼は、悪ぶって他者との距離を取ろうとしがちだが、その実とんでもない寂しがり屋だと言う事を、夏海は理解している。だから、ピントがボケた写真を現像する度に、彼はその表情に、微かな悲しみを浮かべる。拒絶されたと、嘆いて。

それなのに……今回は違う。表情から察するに、拒絶されたいと言う訳でも無いのだろうか……それ以上に、「拒絶される事」で映し出される「何か」に期待しているようにも見える。

「土？」

ユウスケにも、それが不審に映ったのだろう。軽く眉を顰め、土に問う。しかし、土の方はこれ以上答えるつもりは無いらしい。

つい、とそっぽを向き……

「……おい、海東はどうした？」

「海東さんなら……」

ここにいないじゃないですか、と言いかけて……夏海も、そしてユウスケも気付く。先程まで一緒にいたはずの海東の姿が、どこにも無い事に。

思わず周囲を見回すが、彼の影も形も見えない。

「あれ、いない。いつの間になくなったんだ？」

「……どうせ奴の事だ。お宝とやらでも見つけて、盗みにでも行ったか」

不思議そうに首を傾げるユウスケとは対照的に、問いかけた張本人である土は、やれやれと言った風に軽く顔を顰めて自身の憶測を口に出す。

だが……それにしても、妙な話だ。

人通りがそれなりにあるとは言え、この辺りは見通しのいい場所だ。1分そこらで姿を見失うなど、通常はありえないだろう。

仮に、海東が持つ「姿を消すカード」であるインビジブルを使つて消えたのだとしても、それなら使用した際に電子音が聞こえてい

たはずだ。

——でもまあ……海東さんですし——

奇妙には思うが、それ程気にする事も無いだろう。彼だって子供ではないのだから。

と、ある意味薄情とも取れる事を考えつつ、彼女達はもう少しコウの「散歩」に付き合う事にした。

「おいしかったです、コウ」

「そう？ 喜んでもらったなら良かった」

……その後、コウにつれられて、この街の銘菓である饅頭やらケーキやらを食べ歩き、気がつけば太陽も傾き始め、それじゃあ帰ろうかと言う事になった頃。

満足そうに自分の腹を撫でる夏海の姿に、コウは優しい視線を送っていた。

「でも、勿体無いです。あんなに美味しいのに、コウは甘い物が嫌いなんて」

「嫌いって言うか……しばらく、甘い物はいいやって思ってた」

でも、お姉さんはちよつと食べすぎじゃない？ などと付け足しつつ、コウはその顔に意地の悪そうな笑顔を浮かべた。

食べすぎと言われたが、そんな事は……無いはずだ。

確かに、大きめの饅頭2個を平らげた後、ケーキを3ピース程平らげはしたが……

——……食べ過ぎてません。甘い物は、別腹です——

と、心の内で呟いた刹那。夏海の頭上から、聞き慣れた声が降ってきた。

「なつみちゃん」

「キバーラ」

見上げれば、案の定そこにはキバーラがバサバサと羽音を立てて飛んでいた。だが……いつもは楽しそうな雰囲気をばら撒いている

彼女が、何故か今は不思議そうな表情を浮かべていた。

「……どうかしたんですか？」

「『どうかしたんですか？』って、それはこっちの台詞よ夏海ちゃん」

「はい？」

彼女の言わんとしている事が分らず、夏海は思わず首を傾げ、思わず辺りを見回すように視線を送る。

学校帰りの子供達が、わいわいきゃっきやと楽しげな声を上げながら駆け回り、近場にいる中年女性の集団は、やれどこの店が安いだの、どの店の店員は態度が悪いだのと世間話に花を咲かせている。少し離れた神社の境内では、白いスーツの男性が林檎飴売りの男性と何やら話をしているのが見える。

どこにでもある風景だし、キバーラが不審がる理由も思い当たらないのだが……

「夏海ちゃん、ディケイド達と一緒にいたんじゃないの？」

「え……？」

ディケイドと言われ、一瞬それが誰なのかわからなくなる。だが、すぐにそれが土の事であると思いつくと、弾かれたように彼女はもう1度自分の周囲を見回した。

出て行った時は、5人だった。なのに、今は……自分とコウの2人きり。

キバーラが訝るのも、当然だ。

その後、公園の前で海東がいなくなり、饅頭屋の前で土が消え、そしてケーキ屋を出た時にはユウスケがいなくなっていた。

「家に……写真館に帰ったんじゃないんですか!？」

少なくとも土は、

「饅頭同士の共食いを見る趣味は無い。先に戻るぞ」

と、これまた非常に失礼な発言をして帰って行ったはずだ。誰が饅頭ですか、と返した記憶がうつすらとある。

しかし夏海の問いに、キバーラは否定の意思を示すかのように体

全体を横に振った。

「さっきまで写真館にいたけど、帰ってきて無いわよ？　1人で寂しかったから、出てきたんだし」

「そんな……どこに……？　いいえ、その前に、どうして……？」

どうしてその事を……「いなくなった」と言う事実を忘れていたのだろう。キバーラが来なければ……そして「デイケイド」と言う単語を放たなければ、きっと忘れたままだった。ひよっとしたら、「海東大樹」、「小野寺ユウスケ」、そして「門矢士」と言う人物達の事までずっと忘れていたかもしれない。

その事実、夏海の背を冷たい何かが駆け抜けた。

嫌な予感がする。何か、とても大事な事を忘れているような……見落としているような。

そこまで思った時、はっと気付く。その嫌な予感の正体……キバーラの「1人で寂しかった」と言う言葉に。

「キバーラ！　お祖父ちゃんはどうしたんですか！？」

「え？　おじいちゃん……？」

「お祖父ちゃんです、光栄次郎！」

今度はキバーラが、「何を言っているのか分らない」と言わんばかりの声をあげ……しかし直後、彼女はきやあ、と小さな悲鳴をあげた。

恐らく「思い出した」のだろう。

記憶の片隅にあった、「光栄次郎が消えた」と言う記憶を。

「そうよ！　栄ちゃん！！　栄ちゃんがなくなっちゃって……何で今まで栄ちゃんの事を忘れてたの？」

「分りません。でも、私もそうでした。土君やユウスケや海東さんの事……すっかり忘れてて……コウは？　コウはどうでした？」

「俺、は………」

唐突に話を振られた事に困惑しているのか。コウは大きく体をビクリと震わせると、泣きそうな……だけど泣くまいと堪えているよな、そんな表情になって俯いた。

その様子に、まさかと言う思いが過ぎる。

まさか、コウが何かをしたと言うのだろうか。少なくとも、何かを知っているらしい。がたがたと震えるその様は、雨に打たれた時と同じ物だ。

あの時と同じ……何かに対する恐怖で怯えきった表情。

「お姉さんに……聞いて、良い？」

「何を、ですか？」

「どうして、あのお兄さん達に拘るんだ？ 赤の他人なんだろう？」
泣き出しそうな表情のまま、それでもコウははつきりとした口調で問いかける。

確かに、土もユウスケも海東も、赤の他人だ。

人の体型に口を出すわ、居候の癖に浪費するだけして家賃を入れないわ、何かと言うとすぐ柑橘類などと呼ぶわ……

正直、良い所など1つも無い。無いように思える。それでも「一緒にいたい」と思うのは……

「……仲間、ですから。一緒に旅をしてきた」

確かに、苛立たしく思う事は多い。だが、それと同じくらい……いや、それよりも多いくらいの「いい事」だつてある。……非常に分りにくい。

彼らと言う存在に、何度も助けてもらってきた。

命を、心を、そして、思いを。

だから……もしも、彼らが何らかのトラブルに巻き込まれていると言うのなら。

「今度は……私が助ける番なんです。だからコウ、もしも何かを知っているなら……教えて下さい」

「……言え、ない」

夏海の声に、コウは嫌々と首を横に振る。その様子は、やはり何かに怯えているように見えた。

「知らない」ではなく、「言えない」と言つた事から考えても、コウは何かを知っている。しかしそれを言う勇気が無いと言う事な

のか。

無理に聞く事は出来ないと判断し、深い溜息を吐き出した……刹那。

夏海の髪をくい、と引つ張りながら、キバーラがある方向を指した。

「夏海ちゃん、あっち」

「え？」

彼女に促され、そちらを見ると……見慣れたくないのに見慣れてしまった、黒タイツの集団の姿。その一番後ろには、彼らを率いているらしい男の姿も見える。

黒タイツの方は夏海とコウの姿を見やると、一斉に「イーツ」と右手を上げて、敬礼に似たポーズを取る。

それが彼らの「挨拶」である事は、夏海もキバーラも知っている。それにしても、一糸乱れぬ動きは「敵」でありながらも感心する。きっと人文字とかやらせたら、某独裁国家のパレードよりも綺麗で滑らかな絵が出来るだろう。

——どうしてその行動力を他に生かせないんでしょうか……？——
心の中で思いつつ、夏海はそつと溜息を吐き……彼らの後ろに控える人物に目を向けた。

やや頬のこけた印象の初老の男性。白いスーツに、同じ色の蝶ネクタイ。髪は限りなく黒に近い灰色だが、眉は殆ど白に近い。羽織っている黒いマントは、裏地が赤いせいなのか、伝説上の吸血鬼のようなイメージを抱かせる。足を引き摺り気味に歩いているのは、足が不自由な証拠だろうか。

右手に指示棒を持ち、それを左手にパシンと叩きつけるような仕草は、それだけで気圧されそうになる。

「あなたは……？」

「偉大なるシヨツカーのスイス支部支部長……死神博士と呼ばれている」

男の言葉に。

思わず夏海は目を見開き、失礼に当たるとわかつていながらも、まじまじと相手を見つめた。

彼女の知る「死神博士」とは似ても似つかないから。

それなのに、心のどこかでは納得している自分がいる。姿は似ていないのに、雰囲気がいまにも似すぎている。

冷たい、何もかもを切り捨ててしまったような瞳。世界そのものに対する復讐心と、その奥に潜む深い愛情。それが今、何故か一身に自分に向けられている事に気付き……無意識の内に、夏海は死神博士と名乗ったその男性に、薄ら寒い視線を送っていた。

口元にうつすらと笑みを浮かべるこの男こそが、今回の元凶なのでは無いかと……そんな予感に駆られながら……

Episode WHITE: 雨のち晴れ、時々薔薇 (中編) (後書き)

こんにちは。

1月の寒波と寒ブリの大量発生は、ひよつとしたら地震の前触れだったんじゃないかと思ひ始めた辰巳です。

世界規模の天災による被害額が、現時点で去年の被害額を超えたとか。大丈夫か、あと9ヶ月。

ともかく、更新が遅くなりましたことに謝罪です。

言い訳をさせて頂きますと久々に「女の子がかけない病」にかかった拳句、夏海ちゃんのキャラが掴めていない事に今更のように気付いたのです (本気で今更やな)。

と言う事で。

元祖ショッカーの登場ですぜ、「イーッ!」。しかも敵は辰巳が「いつか絶対にやりたい」と思っていた元祖死神博士。

「イカでビール」では無く、マントをかぶって翻したらイカデビルになって下さる方です。

本当は戦闘員も、赤いベレー帽 (所謂初期型の連中) を出そうと思っていたんですが、それは「ディケイド」の中で出ていなかったの、メジャー処の黒タイツのみ。

起こっている事象は

「次々と夏海の周りの人が消える。でも、しばらく経つとその『消えた人物』のことを忘れる」

あれ、何それゼロノスのカード? (黙れ)

出来る限りギャグにしたいのに、やっぱり結局シリアスに転がっていくこの話。

未だ「女の子書けない病」は継続中ですので、完結まで……持つて

いけるか不安っス（致命的）。

では。

今度の「000」の映画に出てくる「タマシーコンボ」の正体が、「タカ・イマジン・ショッカー」と言う推測（それとももうオープンな事実？）に我ながらちよいと凹み気味。

……震災の影響で、近所の映画館が4月末まで営業停止、会社近くの映画館も、計画停電の影響で急に上映取りやめになる可能性があるとか言われて困っている辰巳でした。

折角1日に有休取ったのに……（趣味休暇ですか！？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6952p/>

3人の仮面ライダーの物語

2011年3月30日15時10分発行